
M a g i c

月島 真昼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M a g i c

【Nコード】

N 6 7 0 8 K

【作者名】

月島 真昼

【あらすじ】

「新しい家族を紹介する」ある日親父が連れて帰ってきたのは金髪碧眼でちよつと変わった格好をした美少女で——自称魔術師だった。親父、あんたの年齢と職業を考慮すれば俺は「売春規制法って知ってるか？」と言わざるを得ないんだが…… 中途半端系な魔術ファンタジー？ 週一ぐらいで更新……を目指していましたorz データの入った携帯を落として復旧作業中。最近物をよく落とす……

第1話：底無しの聖杯

冴垣 壮介は父親が軍隊マニアの警察官であることを除けば一般的な高校生だ。

体格は中肉中背。

成績は中の中。

多少体育ができるくらいで至って平々凡々であることを自覚さえしていた。

主役はおるか脇役にすらなれそうもない、言うならばエキストラの1人だった。

自分は選ばれなかった物としてそれ以上を求めることはない。平凡こそが最上。

壮介にとつて人生とはそういう物だったし、そういう物であることを望んでいた。

……はずだったのに。

「おい 壮介。新しい家族を紹介する」

夏休みのある日、

そういつて壮介の父親が首根っこを掴んで連れて帰ってきたのは金髪碧眼でゴスロリファッションないかにも非日常な美少女だった。

「……おい、親父。売春規制法って知ってるか？」

日本の警察はついにここまで落ちぶれたのかと壮介は嘆息した。

「立ち話もなんだ、座って話そうか」

父親が椅子を引いて少女を座らせ、三人はテーブルを囲む。壮介の向かいに父親と少女。父親の隣には自分が来るべきではないのか？、と壮介は思ったが少女の隣を位置取る父親の動きは俊敏だった。かなり呆れた。

「どうした、壮介。これから1つ屋根の下で彼女と過ごすんだぞ。」

自己紹介ぐらいしないか？」

促されて壮介は少女と視線を合わせる。年齢は16、7歳くらいだろうか？ 絶対に20歳は越えていないだろう。壮介が言うのもなんだがまだ幼さの残る顔立ちをしている。しかし美少女だ。そして見慣れない金髪碧眼が少し壮介を気後れさせる。

「……冴垣 壮介です。なにがあったんですか？ 逃げた方がいいですよ」

金髪美少女はきよとした顔で首を傾げた。言葉がわからないのかもしれないと壮介は思ったがそうではなかった。

「いえ、逃げてきたんですけど」

壮介は平凡に家出少女かなにかを一時的に預かっているのかと思いつて父親を見た。少なくとも援助交際の類いではないらしい。安堵する。父親は、

「彼女は魔術師だそうだ」

と笑顔で言った。

「……What？」

「素敵な発音ですね」

金髪美少女は笑みを見せたがその感想は致命的に間違っている。

「あ 申し遅れました。私、反応抑制系原発制御型魔術師で【底無し^{ニ・ゴブレット}の聖杯】と言います。ゴブレットとお呼びください」

「……………」

壮介はどうしても軽く笑うことができなかった。ぺこりと頭を下げた金髪美少女の言葉には冗談というモノの響きが一切なかったからだ。言葉が出ない。

「ちなみにグラトニーと呼んだらこの世の地獄を見せて差し上げます」

洒落か何かのように付け足すがそれもよくわからない。『グラトニー』、たしか鋼の○金術師にそんな名前が出てきた気がするがそれがコンプレックスなのだろうか？

「あ……あの、ゴブレットさん」

「はい」

「その原発制御に魔術師とやらが絡んでるなんて話はインターネットに出ていないのですが」

「機密事項ですから」

「その機密事項をペラペラとボくらみたいな一般人に話してもいいのでしょうか」

「もう逃げてきちゃったんでわたしの知ったこっちゃありませんね」

「その機密事項を知ってしまったボクらの身の安全は保証されてるんでしょうか？」

「ああ、それなら大丈夫ですよ。わたしと関わった時点でお二人は既にバリバリ全開ナンバー1の抹殺対象ですから」

気まずい沈黙が数秒流れた。そのうち父親が言う。

「あつはつは。壮介、じゃあゴブレットさんと一緒に買い物に行ってきてくれ。父さんは逃げるから」

「このクソ親父い！」

壮介はテーブルから身を乗り出して父親の胸ぐらを掴んだ。

警察官の父親に腕つぶしで敵うはずもなくぼっこぼこにされて、壮介はとぼとぼ家を出た。

隣になぜか上機嫌のゴブレットが続く。買い物用の手提げカバンを片手にするゴブレットは見慣れない金髪碧眼でこそあるが単なる年頃の少女にしか、壮介には見えない。

（魔術師、ねえ……）

なんの理由があつてそんなモノを名乗ってるんだらう？

壮介は平凡だった。魔術なんてモノがこの世にあるはずがない。

ここはブロック塀と時々表札が続いてこの先を右に曲がって少し行ったところに大手のスーパーマーケットがあつてその逆側に少し広めの公園がある普通の世界。だから普通のことしか起こらないのだ。

「……なあ　なんでうちなんかに来たの？」

「逃げ出したまではよかったのですが、着の身着のままだったので
炉銀が底について行き倒れているところをあなたのお父上に助けて
頂いたのです」

……もう少し軽い口調で言ってくれたらツツコミやすいんだけど、
どうも初対面の人間を相手に角を張ってるとかそういうレベルでは
ないようだ。

ゴブレットはどうしても『魔術師キャラ』を突き通すつもりらしい。
壮介は少し考えて意地悪な質問をしてやろうと思いついた。

「なあ あんたほんとに魔術師なのかよ？」

存外あっさりウソですよ、と返ってくるかと思っただがゴブレットは
「はい 魔術師ですよ」

とクソ真面目な声で肯定した。壮介は心中で少し笑う。

「証拠は？」

「えーっと、そうですね。じゃああの落ち葉を見てください」

ゴブレットは道脇の枯れ葉を指差した。近くに背の高い木はない
からきつと風に飛ばされてきたのだろう。

ゴブレットが人差し指をピンと立てて空中に小さく円を描く。

「Burn（燃えよ）」

眩きからコンマ数秒あとに葉はボツと明るい火を上げて灰へと変
わった。

壮介は咂然とする。なんだかんだ言ってもゴブレットの言うこと
などまったくもって信じていなかったからだ。

「これで信じていただけました？」

「あ、ああ……」

開いた口が塞がらない、という状況に生まれて初めて陥ったかも
しれなかった。自分はもしかしたらとんでもないことに巻き込まれ
たんじゃないかと今更のように気づく。

「親父の前ではそれ、動かないで」

ゴブレットは壮介の前に手を突き出した。不意に触れた肩の柔ら
かさに壮介はドキッとする。が続く言葉はそんな気分を吹き飛ばし

た。

「どうやら追っ手のようです。しかし事情を知らない雑魚でしょう。このまま戦闘に入ります」

「は、はひっ?!」

ゴブレットが言い終えるか否かのタイミングで向かいから歩いて来ていた1人の男が舌打ちをしながら両手を広げた。

男の手のひらに右にはバチバチとはぜる紫電、左にはゴウゴウと燃える紅の炎があがる。

「う……そ、だろ?!」

男はそれをゴブレットと壮介に向けて放った。

ブロック塀で両側を囲まれた——どこにも逃げ場のない——狭い路地。迸る火炎と雷。壮介は咄嗟に動けなかった。このままでは二人は黒焦げになることは必至にも関わらず、壮介にはあまりにも現実感の薄く感じた。

「芸がない」とゴブレットは呟いた。そしてスウ……と深く息を吸い込んだ。

途端に雷も炎もなにかに吸い込まれてしまったように消えていく。なにが起こったのか、壮介にはさっぱりわからない。そして炎と雷を放った男にもわかっていないようだった。驚愕は反応を鈍らせる。

「Burn!!」

ゴブレットは指先で円を描くと叫んだ。壮介の視界の先で何かが光る。光に触れた男の手にみるみるうちに火傷が広がる。

ゴブレットの使っている魔術の正体は太陽光だ。指先で描く円の示すレンズを通して太陽光を集約して物体を加熱させる魔術だ。種も仕掛けもある。

ただ理屈でなく人間の焼けていく光景は恐ろしい。

「退きなさい。あなたではわたしには勝てません」

男は腕を押さえながらゴブレットを一睨みすると振り向いて駆け出した。

恐怖と緊張から少し解放されて壮介はペタンと尻餅をつく。

「ご無事でしたか？」

前に立っていたゴブレットが振り返って手を差し伸べる。壮介は一瞬、その手を取ることを躊躇った。この手は簡単に人を燃やせる手なのだ。——恐い。

「……あの程度の火傷なら魔術的に治癒を施せば痕跡さえ残らずに完治するでしょう。それにやらなければ殺られていたのはわたし達です」

ゴブレットは少し寂しそうに笑った。

そんな顔を見せられては手を取らないわけには行かなかった。その手の感触はやはり十代の女の子のモノで細く柔らかい。

「やっぱり、ご迷惑ですよね……」

ゴブレットは俯いてしまった。壮介はどうしようもなく心が粟立つ。

（ああ、クソッ……）

非日常に魅了されている。と壮介は思う。わずか数時間を共に過ごしたただけなのに俯いてしまった少女が……、

エキストラなんかで、脇役なんかで居たくはないのだ。誰かを守る主役でありたい。

そんな気持ちがあふと過ったが壮介はそれをゴミ箱に丸めて捨てた。無理だ。壮介はそう断言できる程度に自分の平凡さを知っている。

「買い物！ 行くぞ！」

壮介は控えめに声を張り上げた。

「え……あ、はい！」

少し呆気にとられたあとゴブレットが嬉しそうに笑ったのが壮介にも嬉しかった。

買い物は楽しかった。ゴブレットはまるで家事一般に疎くてなにか知らないモノを見るたびに壮介に訊ねてきた。得意になって説明したり、一緒になって首を捻ったり、笑った。

それは互い先ほどの光景を忘れようとわざとあかるく振る舞っていたのかもしれないけど。

「……そういえば、親父の前では魔術つてのを見せたのか？」

帰り道で壮介はあの男の乱入で聞き損ねたことを訊ねてみた。どうせ見せていたのだろと思うが他に訊くようなこともなかったのだ。

ただ会話を続けたかっただけかもしれない。

「いいえ」と、ゴブレットは言った。

「あの方はわたしが魔術師だと名乗るとそのままだ『そうか』って」

ゴブレットの口調は軽い調子だったがあきらかに壮介の顔色が変わる。

「じゃあ親父は、」

壮介と同様に魔術師というのを真に受けていた訳ではなかった……

……？

「もう一度安全な場所に逃げてらっしゃるのでは？ 先ほどそう――」

――

「バカ！ あんなの冗談に決まってるんだろ」

追っ手、とゴブレットが言った先程の男は二人を見るなり容赦なく襲いかかってきた。警察官である壮介の父親はまともに戦えば結構強い。

だがまったく無警戒の家のなかで突然襲いかかられたら――？

魔術という得体の知れないモノが相手だったら――？

「悪い、走る！」

「え、ちよつと……！」

悪い予感がして壮介は家のほうへ駆け戻った。提げた荷物の重さが鬱陶しい。壮介は全速で駆け抜けた。

「ッ……、！」

惨状はあきらかだった。先ず玄関の扉が破壊されていた。血のあとが続いている。白い壁面に無数の、刃物を叩きつけたような傷が

ある。壮介はそれを追って和室へと踏み込んだ。

「親父っ！」

「壮介、男女の逢い引きに割って入るとは感心しないな？　いますぐ出ていきなさい」

父親はいつものように軽口を叩いたがその腕からは鋭い傷が覗き血が畳を濡らしていた。喉元には刀の切っ先を突きつけられている。「単刀直入に聞こうか。グラトニー」ゴブレットはどこだ？」

2mはあるうかと言う刀を持つボディラインにぴったりの黒い服を着た女性が壮介を振り返る。

刀の先には当たり前のように血がついている。黒い服に飛んだ返り血を気にする様子もまったく見せない。

（なんなんだよ、こいつ……）

『この女は人を斬り慣れている』

素人目にもなんとなくそう思えるだけの迫力が女にはあった。

「ここ、ですよ」

小さく息を切らしながらゴブレットが追い付いてきてしまった。

女が薄く笑う。笑顔が冷たい。壮介はゾクリと背筋に戦慄が走るのを感じた。

指先が震えている。否、奥歯がカチカチと音を立てている。冷徹なまでの殺意は壮介を凍てつかせるに充分だった。

「おいゴブレット。あいつは何なんだ……？」

スベルエンド

ブラック・ブラック・ブラック

『『魔術師の最終』が第13位、『暗くて深い黒』アサギ』イクツキ。はつきり言ってボスキャラです。正直、

わたしじゃ勝てないかも……」

「お前さっき自分がめちゃくちゃ強いみたいなこと言ってたじゃねえかよ」

「いえ　わたしもあんな戦闘特化が出てくるとは……　けどまあ大丈夫ですよ」

ゴブレットはまた少し寂しそうに笑った。

「あなたとお父さんくらいは守って見せますから」

お前っ…… 壮介はゴブレットを引き止める言葉を言おうとした。喉がヒクついて声にならなかった。

「——ご迷惑おかけしました。楽しかったです。ありがとうございます」

「っ……」

ゴブレットは壮介を追い抜いて一歩前に進み出た。

「確認する。『底無しの聖杯』で間違いないな？」

「はい」

「出勤命令に応じずに逃亡した罪をいまならまだ見逃してやると上層部は言っているがいまからでも徴兵に応じるか？」

「否です。わたしはこの力を他国に向けるなんてことは絶対にしません」

「貴様の存在は此度の『戦争』の結果を大きく左右するモノだ。そのような私見は通らないな」

「な、なんだってんだよ……？」

他国？ 戦争？ 存在？ なにを言っているのかわからない。壮介には魔術についての知識はまったくないがゴブレットのレンズの魔術は襲ってきたあの男の炎と雷よりもはるかに攻撃能力は低いように見えた。それにゴブレット自身が言っていたように彼女は『原発制御型』であって『戦闘特化型』ではない。

戦争にゴブレットが必要になるとは壮介にはどうしても思えない。一般人に言っても無駄だろうがな、

幾月 アサギは少し刀を下げた。その瞬間に父親がなにか動きを起こそうとするが彼女に隙はなく、凍りつくような殺気に動作を止めざるを得ない。そもそも素手の彼と刀を握る幾月ではリーチが違い過ぎる。

「もうすぐ世界規模の魔術大戦が起ころうとしているのだよ。一般人の知らぬ裏の世界でな」

魔術大戦——、壮介は昔プレイしたことのあるRPGを思い浮かべた。滅んだ、んだったよな？ あのゲームだと世界が一度。

「その女の特異な能力は息を吸い込むことでありとあらゆるエネルギーをその場から吸収して自身の体内に溜め込むことだ。だから『底無しの聖杯』と呼ばれているのだよ。」

そして原子炉の余剰エネルギーを吸収して炉の出力をコントローलする役割をしていたこいつの中には莫大なエネルギーが蓄積されている。

それを他国に向けて放つことができればどうなると思う?」

幾月は一度言葉を切った。震える壮介とゴブレットを一瞥して、続ける。

「世界最強の兵器の完成だ。勝利は先ず間違いなくなる。わかったらさっさとその女を突き出せ。それだけで貴様の命は助かるぞ、少年」

ゴブレットは振り返らなかった。それと同じように壮介はゴブレットをつきだそうだななんて少しも思っていなかった。

だって、ゴブレットは何も悪くないのだから。

少なくとも追われるようなことは、逃げ出さないといけないようなことなんて何もしていない。

「……あなたと戦います。わたしが負けたら従いますから、二人には手を出さないでください」

「『決闘^{デュエル}』か。いいだろう。こちらとしては貴様さえ手に入ればあとはどうでもいいからな」

幾月は部屋の隅まで歩き、嵌め込み型で開かない窓に向けて刀を一閃した。

キーン と鋭い太刀音がして金属部分までが豆腐のように切断される。刀の通過した周囲の壁に線が残る。あり得ない切れ味だ。

「ここは手狭だ、屋外に行こう」

そのまま人間には到底不可能な跳躍力で飛び出して行った。

「……大丈夫、なにも心配しないでください。今日のことは1日限

りの夢だったんです。

あなたたちの人生にグラトニー「ゴブレットという人物は現れなかった。ただそれだけの話です」

壮介はゴブレットを見送ることしかできなかった。言葉が出なかった。ゴブレットもまた震えていることはわかっていたのに――

嵐が去ったあとは至って静かな物で軍隊マニアの父親は応急措置ぐらいは自分で出来ると豪語し実際テキパキと処置を終えてしまった。

ただ喪失感が、あった。

出会ったばかりだと言うのに。

望んでいなかった非日常が去って行ったというのに。

「なんでだよ……」

夢という言葉はゴブレットは使った。きっと夢だったのだ。ゴブレットに取っては。

普通の会話。

普通の仕草。

普通の親。

普通の壮介。

そんなモノが。それはバカげた妄想かもしれない。

壮介の頭の中で去り際の寂しそうな笑みが滲して消えなかった。バチン、と強く背を叩かれて壮介は父親を見た。

「行ってこい」

それを受け取って壮介は少し目を落とし、やがて大きく頷いた。

「このあたりでいいな」

幾月 アサギはある公園に降り立った。そこはただっ広い平らな土地が広がっていて普段は子供らがサッカーなんかに興じている場所だった。

ゴブレットが数十秒遅れて静かに降り立つ。その時間の差はゴブレットと幾月の魔術的な技量の差を明瞭に示していた。

「では、始めようか」

幾月は居合い抜き構えを取った。鞘に納めた刀の柄に利き手を添えて逆の手で鞘を固定し、強く踏み込めるように姿勢を少し低く作る。『物体の存在を操る魔術』を得意とする彼女にとつて間合いはほとんど意味をなさない。刃の存在を魔術で延長すればそれできと足りるからだ。その上で速度と威力の両方を極めた居合いという技はまさに必殺と呼ぶに相応しい威力を誇っている。

抜けば勝つ。『魔術師の最終』が第13位、『暗くて深い漆黒』はそれだけの技量を持つ魔術師の一人だった。

だから、彼女は異様な手応えのなさが信じられなかった。

（空振りだと……?!）

彼女の限界値である約3倍まで存在を延長したはずの刃は形をなさずにただ2m近い抜き身の刃だけが空を滑る。ゴブレットは間合いの遥か外だ。

『底無しの聖杯』が刃の延長のためのエネルギーを吸収してしまっただのだ。

（放出系だけでなく強化、付加系魔術でさえ吸収の対象内だと言うのか）

舌打ちしてBurn、の声と共に打ち出された光線を横っ飛びに回避する。

連続して打ち出される光線を弾くために刀を振るう。彼女はほとんど慣れで存在の延長を使った。

無力化される。当然そう思ったが光線が弾かれ、同時にゴブレットの肩口が浅く切り裂かれた。

（……そうか あいつの魔術の発動には発声が必要、つまりそのあいだは息を吸い込むことで発動する無効化の能力を使うことはできない）

そこから幾月は速かった。刀を鞘に納めると利き手を柄に触れさ

せたままゴブレットに突進する。光線の魔術で迎撃すればゴブレットはその刹那に切り裂かれてしまうだろう。

ゴブレットは大きく円を描いて光線の魔術を準備段階まで起動した。

幾月には一瞬でわかった。ゴブレットは食らうつもりなのだ。リーチを延ばす『延長』と切れ味を増強する『強化』、幾月の操る2つの魔術を無効化し居合いの一撃を食らい、耐える。その上で光線の魔術で攻撃する。

ナメられたものだ…… と幾月は思う。

もちろん絶命しない程度に力を止めるつもりこそあるが、幾月の使っている2m近い大刀はふつうの日本刀だ。当然斬れるし斬られれば痛い。激痛のなかで光線の魔術を放つことなど不可能だ。

幾月は刃を延長する必要のない本来の刀の間合いまで踏み込んだ。そして――、

「グラトニーっ！」

幾月の放った刀の一閃は割って入ってきた少年に突き刺さった。

ゴブレットの無効化能力によって『存在の強化』こそ無力化されているが日本刀本来の切れ味が暴威を振るうのは想像に難くない。

「しまっ……」

強大な光が幾月の網膜を刺した。かわそうとする。が間に合わない。巨大なレンズを透して集約された太陽光の光線が突き刺さる。

幾月は寸前で自身の皮膚の存在を強化し火傷を防いだ。その反応の早さは『魔術師の最終』である彼女だからこそだっただろう。

（まだ…… たたか……え……）

あるいは生半可に防いでしまったのが彼女の続闘を不可能にしまったのかもしれない。存在の強化された皮膚は押し寄せる熱を外に逃がせなかった。

ぐわんぐわん と熱中症患者のように視界が回り幾月 アサギはそのまま地面に倒れ伏した。

カチン と彼女の手から離れた刀が小さな金属音を立てた。

「バカッ どうして！」

ゴブレットは壮介の肩を揺さぶった。重傷患者を迂闊に動かしては行けないだとかそんなことは完全にいまの彼女の眼中にはない。

「いつ……、」

壮介は小さく呻き声を挙げた。ゴブレットは我に返る。得意でない治癒の魔法でも気休め程度にはなるかと服を捲り上げた。

「へ……？」

「いつってえええっ……」

そこに、刀傷はなかった。赤くなっていた。腫れが目立つ。壮介の傷は見た目にはそれくらいだった。よく見たら服も切れていない。

「あ これ、親父の趣味の防刃服で…… ぎゃあっ?!」

ゴブレットは力一杯壮介を抱き締めた。ちなみに『斬れていない』というだけで肋骨は折れてたりするので当然、超痛い。

ゴブレットは悲鳴に近い壮介の声を聴いても力を緩めなかった。そのうち悲鳴は「いじじ……」という意味不明な奇声へと変わる。

「わたしのことをグラトニーって呼んだよね？」

涙ぐんだ声を強がりで隠して、ゴブレットは言う。

「この世の地獄を見せてあげるんだから！」

もう見えます、と壮介は薄れていく意識の中で思った。

第2話：「このドケチめ」

朝、冴垣 壮介は目を覚ました。窓から入る日の光が浅く目を刺す。

「……ああ、そうだよな。魔術とかそりゃあ全部夢だよなあ」

いつも通りのベッドの感触、

布団の暖かさ、

枕元で充電している携帯電話、

自分の腕を枕にしている金髪の少女、

完璧に普通の朝——、……だ？

「うわあっ?!」

なんかいた！ 壮介は周りを見渡す。間違いなく自分の部屋だ。

金髪の美少女が自分の手を枕にして寝ている。

「んー……？ ああ、おはよう。壮介」

ゴブレットは首を起こしてまだ眠たそうに瞼を擦った。

……ああ、思い出した。全部夢なんかではなく現実だった。この少女は『底無しの聖杯』の異名を持つこれから起こるらしい魔術戦争の切り札で、そんなことに手を貸すのが嫌で徴兵から逃げ出してきたのだ。

それから——、

「……それからどうなったんだっけ？」

たしか『暗くて深い漆黒』とかいう魔術師と戦って公園で気絶したんだよな……？

「壮介のお父さんが来て背負って帰って治療したんだよ」

ゴブレットの語るところによると親父は特殊警棒と全身防備で訪れたらしい。

息子を防刃繊維1つで行かせて自分はそれかよ……

壮介はあきれて息を吐いた。肺のあたりがピリリと痺れる。自分

が上半身裸で胸のあたりを包帯を巻いて固定されていることに気づく。

「……あれ？」

折れた、とあの瞬間に壮介は自覚していた。いかに防刃性の科学繊維だろうが全ての衝撃を吸収し切れるわけじゃない。肋骨の数本は確実にイッた。それだけの衝撃が壮介の体を駆け抜けた。だが、（あんま痛くない……？）

少し体を捻ってみると鈍い痺れこそあるが自分が骨折しているとは思えない。小さい頃によく折ったり折りかけたりはしたからあの痛みはよく覚えているが、いまの痛みは2日ほど時間を置いた打撲のあとのモノによく似ていた。

「無理しちゃダメだよ！ 魔術で無理矢理くっつけてるんだから、外れちゃったら大変だよ」

ゴブレットは眠たげに目を擦りながら頬だけを膨らませて怒る。

なんだか表情がアンバランスでかわいい。

「ほとんど徹夜で治したんだからね、感謝してよ！」

感謝はするがそういうのは壮介が自分で気づくからジンと来るもんなんじゃないだろうか？

少し苦笑しながら「ありがとう」と言おうとしたら能天気なインターフォンがそれを遮った。

…… ああ 日常の音だ。

時計を見ると父親はもう仕事に行っている時間だ。壮介はベッドから起き上がった。服を着る。あんなことがあっても親父はあっさり受け入れていつも通りの日常を過ごすんだろう。そう思いながら階段を降りて玄関に向かう。ゴブレットが付いてくる。

余談だが壮介の家は一軒家でこそあるがそう裕福ではなく（一重に父親の趣味のせいである）、カメラ付きで来訪者の顔を確認できたりはしない。もしそうだったなら壮介は間違いなく居留守を使っただろう。

「おはよう、いい朝だな」

破壊された玄関の奥からボディーラインにぴったりの黒い服を着た長身の女性が顔を出した。本来なら玄関を閉める場面なのだろうが閉めるべき扉が存在していないので壮介は表情を苦めて二、三步後退る。

「……やむを得ないのだろうが、やはり歓迎されていないな」

黒くて長い棒切れを片手に幾月 アサギは微笑する。どこか感情の読み取れない表情だ。

「な、なんの、ようだ……？」

本人としては抑えたつもりだったのだが壮介の声は大分引き吊っていた。

「グラトニー」ゴブレットを回収しに来た、と言ったらどうする？」

幾月はやはり微笑を崩さないが、その目がなんとなく昨日と違うことに気づく。なんとなくだが恐くない気がする。殺気というモノだろうか？ が薄い。

「安心しろ、魔術師が『決闘』に負けたんだ。そんな不様な真似はしないさ」

「『暗くて深い漆黒』……」

横から顔を出したゴブレットが呟く。さすがにゴブレットは壮介よりしつかりしている。

「なかに入れてくれないか？ 落ち着いて話したいんだが」

壮介は横目にゴブレットを見た。魔術師『底無しの聖杯』は小さく頷いた。

「私の部隊は君達の捕縛の任務を放棄した」

と、幾月は切り出した。

「両者の同意で始めた『決闘』で決めたことを破ることは魔術師に取って最大の恥辱なの」

ゴブレットが壮介に耳打ちする。壮介にはよくわからないがそういうモノなのだろうといい加減に納得することにした。

「新しい任務が来るまで私はひまなんだよ」

と、幾月。

……なにが言いたいのか非日常的にわかってきた気がして壮介は頬肉を引き吊らせる。

「私はアロスIIラハイヤンの命令で動いていたが今回の戦争に『底無しの聖杯』などを使うのは個人的には反対なんだ。我々『魔術師^{スベ}の最終^{エンド}』が居ればゴブレット、お前など要らんと私は思っている」

「つまり……？」

「護衛をしてやるから代わりにこの家に泊める。任務を放棄したから上が宿代を出してくれんだ」

親父ならば「若い女性は歓迎だ！」なんて言いながらこれをあつさり承諾するんだろうな、と思いながら壮介はやっぱゴブレットを見た。ゴブレットはなにかを考え込んでいる。

壮介はとりあえず意味不明な単語を整理して見ようと訊ねる。

「……なあ スペルエンド、ってなんだ？」

「その道にこれ以上に先はないと言われるまで極めた魔術師のことだ。いまではだいたい戦闘面で上から数えて13人目までの魔術師のことになっているがな」

「……つまりあんたは魔術師の中で戦闘面に於いて13番目の強さを持つてるってこと？」

「12位まではそうなるんだが、^{不吉な数字}13位は少し違う」

「……、？」

「『桁外れ』ってことさ」

「なるほど……」

苦笑いを堪え切れなかった。なんとなくゴブレットに振る。

「ちなみにゴブレット、お前は？」

「え？ あ、えー……5千……」

「ダメダメじゃねえか！ お前よくそれで見得きつたな？！」

「し、失礼な！ 魔術師は2万人以上いるんだよ！ 1/4以下つて結構スゴいことなんだよ！」

顔を真っ赤にして叫ぶゴブレットを二桁台はクスクス笑って見ている。壮介は5千でスゴいなら13つてのはどういう数字なんだろうと心中で肝を冷やす。

同時にそんなのが護衛なら少しくらいは安心できるのだろうか？と思う。突然襲われて昨日はいっぱいだった。あんなのが続けば到底耐えられるとは思えない。だけど壮介としてはゴブレットを放り出すのも……、嫌だ。

まだ隣でギヤーギヤー怒っているゴブレットに冷めた声を掛ける。
「……どう思う？」

ゴブレットは不満そうに唇を尖らせたが一度息を吐くと魔術師の顔に戻った。

「んーとね、とりあえず受けてみるしかないと思う」

「信用、できるのか？」

「少なくとも『魔術師の最終』が『決闘』の結果を無視するようなことはしないと思うんだ。それに……」

控えめに、言う。

「わたし一人で逃げるならともかくこの家でちゃんと暮らそうと思つたら、護衛は必須だと思う」

「……わかった」

「決まりか？」

「ああ、」

父親には、ああいう性格だから事後承諾でかまわないだろう。

「よろしくお願いします。幾月さん」

「ああ 任されたよ、少年」

予期せぬ居候がまた1人増えた。

布団を叩いて埃を落とした。押し入れにしまってた長い間使っていない二組の布団はなかなか豪快に綿埃を吐き出す。

「ふう……」

「少年」

手持ちぶさたに突っ立っていた幾月が後ろから声を掛けてきた。
ベランダに出ていた壮介は内心でビクつきながら振り返る。

「な、なんですか？」

「私に他に聞きたいことはないのか？」

「……なんで？」

「別に。少年が奥歯にモノが挟まったような顔をしていたから気になっただけ」

「……じゃあ、幾月さん」

「アサギで構わないぞ。なんだ少年」

「……アサギさん、あんたがぶった切ったドアと窓 直せるか？」

「……わ、私の武器は刀だ」

幾月が目に見えて狼狽した。

「知ってる」

「刀ができることは切ることだ」

「知ってる」

「ならばなぜ訊いた？ 私は魔術師であり剣士ではあるが大工ではないぞ」

存外にできないと伝えようとする幾月は難しい顔をしながら言い訳を追加する。

「普通にそういった業者を呼べばいいはずだが 時間こそかかるかもしれないが直せないことはないだろう」

「いや 事情の説明が、さあ……」

「問題ないさ。そもそも君は丸見えの玄関が真つ二つになっていて通行人が騒ぎ立てないことをおかしいとは思わなかったのか？」

「あ…… そういえば」

「『存在の弱化』、物体や空間に関する認識を弱める魔術さ。例えば君はこれをなんだと思う？」 「なにつて棒切れ……、?!」

幾月は先端部分を握って少し横にズラした。銀色の刃が少し顕になる。壮介が棒切れだと思っていたモノは鍔のない日本刀とその鞘

だ。

「君は私の武器が刀だと知っているのにこれにあまりに注意を払わなかった。これが『存在の弱化』の効果だ。君はこれが刀で危険なモノだと知っているからいま反応できたが、何も知らない人間にはそもそもこの刀が抜き身でも危険なモノだと認識できない。」

いま君の家の扉と窓にも同じことが起こっていて、通行人はそれらが壊れていることが当たり前で騒ぎ立てることではないと思っている。

まあ魔術師同士ならば違和感を嗅ぎ取れるし、弱化している物体は恐ろしく強度が下がるから戦闘の役に立つ魔術ではないがな」

「へえ」

「修理には業者を呼びたいさ、……ってなんだその手は？」

「金。あんたが壊したんだからあんたが払え」

「君の言うことには一理ある。しかし私はいま実際にほぼ一文なしという現実を抱えていてだな、」

「金」

「……君は案外がめついな。見た目のキャラからは想像がつかなかった。以後注意しよう。このドケチめ」

ゴブレットは壮介の部屋で漫画を読んでいた。

「むむつ 日本の文学は難しい……」

読み終えたそれを置いて次の一冊に手を伸ばした。表紙には『ク。マティ高校』と書かれている。その内容がどこをどう間違えたとしても文学でないことを彼女は知らない。

（それにしても……、）

彼女は思う。自分がこんなに平和な時間を過ごしていることが信じられない。

逃亡から約1週間、3日間は暗い路地裏で野宿しわずかなお金で

安い食べ物長く食べて凌いだ。強力な追っ手に当たって命からがら逃げ出してきたのが4日目。この日は恐くて眠れなかった。

協力してくれる友人の元によく辿り着いてお風呂に入れて貰ってるあいだに電話の声が薄く聴こえてきたのが一昨日。

「ええ、ここにいるわ。引き留めておくから早く来て頂戴」

ゴブレットは服を着ると荷物も持たずに飛び出した。

ひたすら走って、そのうちもうどうでもいいような気分になってぼーっとしてきて、壮介の父親に問い詰められて強引に連れ帰られたのが昨日のこと。

巻き込んでしまう、そう思いながらもゴブレットは出ていけなかった。久しぶりの人の温もりは冷えきった心には暖かすぎた。

「ゴブレット、昼飯できたぞー」

階下からの壮介の声に微笑んでゴブレットは両手を合わせて目を閉じる。

「——どうか、どうかこの小さな幸せを壊さないでください」

しかし敵は容赦なくそんな思いを引き裂く。

「……なんの冗談だ。それは」

『フレイム・ベル炎を呼ぶ鐘』の異名を持つ魔術師、ジャック・クリーパーは偵察に出していた部下からの報告を訊いて顔をしかめた。

彼は『底無しの聖杯』の捕縛を任された一団の1人だ。アロス・ライヤンからの直々の命令であるこの任務を足掛かりに上層とパイプを作って行こうと考えていた。

しかし『暗くて深い黒』なんて化け物を相手にするとは聴いてい

ない。

「怖じ気づきましたか？」

と、アロスとの連絡役を果たしている男は言う。挑発するような響きがある。

「まさか」 強がつて見せたがジャックは冷や汗を自覚している。仮にジャックの部隊が全員で一斉に仕掛けたとしても『暗くて深い黒』単体にとっても敵わないであろうことは容易に想像がついた。『魔術師の最終』とはそれほどまでに圧倒的な存在なのだ。

（正面から相手にするには分が悪すぎるな…… 部下をぶつけて隙を伺うか。しかし『暗くて深い黒』がなぜ『底無しの聖杯』なんて無名も等しい魔術師に付いたんだ……？）

彼は近隣の公園で行われた戦闘を知らない。それどころか『暗くて深い黒』が彼と同じ任務についていたことさえ知らない。

そしてその両方を知っている連絡役の男は可笑しそうに微笑む。

「期待していますよ。『三桁』さん」

片側だけでも2万人以上存在する魔術師の『100番以上999番以下』、主に敬称であるはずのそれを皮肉として使う目の前の男をジャックは鋭く睨む。

「そのうちあんたにも泡吹かしてやるよ。『ボルト・ガイスト 奇怪な宴』」

第3話：敵を倒さない限り

夜だった。時計を見ると短針は二時を指している。

「――来たな」

最初に気づいたのは幾月だった。最も殺気に近い場所で生きてきたからだろう。隣のコブレットを起こし、壮介の部屋をノックもせずに関ける。

「……ふむ」

幾月はベッドに横たわっている壮介の額を踏んだ。

「……俺はお前になにかしたか？」

「起きろ、敵だ。……いや そのままにしている」

ドゴオオン！

第一波は爆音として壮介達を襲った。家屋全体に衝撃が走る。ゴブレットはバランスを崩した。

「きゃあっ?!」

幾月がゴブレットを掴む。

「騒ぐな、家全体の存在を強化している。この程度の攻撃ならば2分は持つ」

「ほんとかよ……」

「それにどうせ、あちらもこの程度は挨拶代わりさ」

壮介には幾月の表情が読めなかった。

（ほんとにこいつに護衛なんか任せてよかったのか……？）

ドゴオオン！

「ッ……」

二発目の爆音が壮介の思考から疑念を奪う。

幾月は揺れのなかでも平然と立っている。少なくともこの場で一番戦い慣れているのは幾月だ。

「さて、当然だがこのまま攻撃を受け続ければ持たない」

幾月は切り出す。どこか楽しそうに見えるのはきつと間違いでは

ない。

「私が表に出ればこの家の存在の強化は解かねばならない。そうなればここは安全ではない。私が先行して包囲を解くからそのまま二人は私を追い抜いて全速力で逃げろ」

「おい 追い抜くってあんたは、」

「少年は私を誰だと思っているんだ？ 5分で蹴散らして追い付いてやるさ」

「…… 壮介、幾月が正しいよ」

「わかって、る」

「『魔術師の最終』っていうのはふつうの魔術師が束になっても勝てるような存在じゃないの。わたしが勝っちゃったのは無効化とまぐれと壮介のお陰だね」

「……」

「信用していいんだよね？」

「任せろ、といまは言ってる。あまり時間もない。行くぞ」

「待て」

「なんだ？」

わずらわしそうに振り返る。

「あんたが強いのはわかってる。けど相手を殺さないでくれ」

「わたしからも、お願い」

「…… 善処しよう」

そして『暗くて深い黒』が駆け抜けた。

先ず玄関から直線上に立っていた1人目は鞘を腹に突き立てられた。

体ごとブロック塀をぶち抜いて止まる。肺が潰れるくらいの衝撃はあったかもしれない。

「来るぞオ 備え、」

号令を取ろうとした屋根の上の男の横っ面を存在を延長された鞘が穿つ。

「あああっ！」

幾月の前方の二人が炎を片手に生み出し飛び掛かる。

しかし幾月の手が刀にかかったのを見て明確に怯えが走った。

「——ちっ」

幾月はそれを冷静に見極めて舌打ちした。致死の刃を納めたまま後方の鞘のほうを延長して後ろの数人を薙ぎ払う。それらは紙切れのように吹き飛ぶ。前方の炎はサイドステップで回避する。

ブロック塀に足をつけてそのまま体を回転させて塀の上に足を掛けて更に跳躍した。

「行けっ」

空中で真下に向けて鞘を振るい吹き飛ばす。屋根の上に着地する。同時に壮介とゴブレットは駆け出した。その行く手を阻もうとする魔術師達を高く飛翔する幾月が鞘を振るって塀ごと刈り取る。

（人間じゃねえ……）

と、壮介は幾月のことを思う。『底無しの聖杯』は身体能力を強化する類いの魔術も無効化する。本来それをフルに活用してこそ日本刀使い『暗くて深い黒』は魔術師の第13位なのだ。

壮介達が走り去ったのを確認して今度は幾月が魔術師達の行く手を塞いだ。

「喜べ貴様ら、今日の私は少し優しい」

ニイツ と笑みを浮かべる。

「半殺しで勘弁してやろう」

数の上で圧倒的に勝るはずの中隊クラスの魔術師団は1人残らず震え上がった。

『底無しの聖杯』は本来戦闘型の魔術師ではない。

「……来たな」

「?!」

そして包囲を抜け出されることを想定して待ち構えていた『炎を
イム・ベル

呼ぶ鐘』の異名を持つ少年は完全な戦闘型の魔術師である。

ゴブレットは起動寸前まで練り上げていたレンズの魔術を放棄した。彼にそれが通じないことがわかっていているからだ。

「壮介、あいつは……ダメです…… 逃げましょう！」

「逃げるつたってどこに！」

言われてゴブレットは自分が動転していることに気づいた。いま来たのは一本道だ。幾月と大勢の魔術師が戦っている中に戻ることができるが、逃げるなどできはしない。

「ボクに勝てないことはわかってるだろ？ めんどくさいからさっさと投降してくれ」

「倒すぞ、ゴブレット」

「……はい」

呆れたように少年が吐き出した溜め息がひどく、くぐもって聴こえた。『炎を呼ぶ鐘』が音波を大気摩擦に変えているからだと言レットは知っている。

「お前の魔術は息を吐いたら解けるんだろ？ ならば息を吸い続けるのが不可能になるまでずっと攻撃し続けたらいい。実にシンプルな解答じゃないか」

ブワリと空気が熱気を帯びて持ち上がる。

三桁の魔術師『炎を呼ぶ鐘』はその名の通り火術使いだ。彼は魔術によって狭い領域に強力に反響させた声の振動を摩擦熱に変えてそれを触媒に炎を起こす魔術師だ。ゴブレットの光線の魔術くらいの温度なら取り込んでしまえるくらいに彼の火術は強い。

『炎を呼ぶ鐘』は炎を使わずに直接熱波を放った。空気を歪ませながら直進する熱波が壮介とゴブレットを襲う寸前でゴブレットは息を吸い込む。

『炎を呼ぶ鐘』だって魔術を何十秒も維持し続けることは難しいはずだ。息継ぎしたほうの負け。

根比べ——、と彼ら二人は思っていた。

『炎を呼ぶ鐘』は勝てると確信していた。その根拠は単純に前回は

勝ったからだ。

ゴブレットはイケると信じていた。自分だけじゃない。壮介が居る。守らなければならぬ。

「おいっ　ちょ、お前……、」

彼らの思惑から大きく離れたところで戦況は動いた。何の躊躇いもなく一人の少年が『炎を呼ぶ鐘』に突っ込んできた。

小さく腰を回して振るわれた拳が彼に胸に突き刺さる。『炎を呼ぶ鐘』は小さな体をよるめかせてなんとか踏みとどまる。が、続けて膝が飛んでくる。頭を抱えるように逆の手が回っている。ムエタ伊の戦型に近い。『炎を呼ぶ鐘』は頭を掴まれる前に無理矢理体を横に捻った。ギリギリの回避。それから警戒するように数歩退く。案の定追撃に繰り出された回し蹴りが空振る。

その間ジャックは魔術の操作に気を回すことが出来なかった。

「ふう」

ゴブレットが息を吐く。接近戦に魔術を使おうとすると今度は壮介が飛び退いた。

「……あんだ、素人の動きじゃないな。なにか格闘技でもやってるのか？」

「親父の趣味で軍隊格闘技？とか言うのを叩き込まれた。全然勝てないんだけどな」

「そうか」

『炎を呼ぶ鐘』はそのまま180度方向を変えた。そのまま脇目も振らずに駆け出した。

「……ふう、なんとかあったか」

「壮介！」

と、一息つくこうとする壮介の頭をゴブレットはグーで叩いた。

「次からそういう危ないことするときは一言いつて！」

「だ、だって言ったら止めただろ」

「あたりまえでしょ！　っていつか心臓止まるかと思った！　壮介のバカ！」

ペチン とにぶい平手が壮介の頬にあたる。ゴブレットは顔を見ずに歩き出す。

「……な、なんなんだ？」

壮介は訳がわからないままそのあとに続いた。

幾月と戦った公園に辿り着いて壮介とゴブレットはベンチで一息ついた。

あらかじめ待ち合わせ場所をここに決めていたのだがさすがに幾月はまだ着いていないようだった。

「なんか飲むか？」

「いまは…… まだちょっと喉を通らないと思う」

小さな声で言う。周囲はまだ安全とは言い難い。ゴブレットが警戒心を緩めたくないのもわかる。

壮介はゴブレットの手を取った。その手は小さく震えている。

「大丈夫だよ」

「え……」

「大丈夫だ。俺は幾月みたいに強くはないけれどお前が心細くないように手くらいは繋いでてやれる」

「…… かつこつけ」

なんて言いながらもゴブレットはの手から震えが消えた。

「あの、ラブコメしてるところ失礼しますが……」

「「してない!!」」

話し掛けてきた男が盛大に噴いた。

壮介はその男にふと違和感を感じた。このあたりに住んでそこそこ長い男の顔に見覚えがない。どこかのファッション誌をそのまま切り抜いて持ってきたような格好で端正な顔立ちをしている。

敵？ にしては殺気がない。

ただどさつきから妙に背筋が冷たい。

「そいつから離れる！」

幾月の声が公園を割った。男は幾月を振り返って微笑してみせた。
「遅かったですね、『暗くて深い黒』あなたならばあの程度のザコは三秒で片付けられるモノかと思っていいましたが」

「なぜ貴様がここにいる？」

「なぜ、ってそりゃあ……」

壮介の視界の端でパラパラとジャングルジムが無造作に崩れた。

（え……？）

「『底無しの聖杯』の捕縛任務に決まってるじゃないですか」

そしてジャングルジムは単なる無数の鉄の棒となつて幾月を襲った。

幾月は存在を強化した鉄拵えの鞘でそれらを受け止める。

――が、

幾月の体は吹き飛んで吹き飛んで吹き飛んで公園の外に叩き出されて5度ほどバウンドしてようやく止まった。

「ああ、申し遅れました」

壮介は動けなかった。

ゴブレットも動けなかった。

「自分は『魔術師の最終』が第3位、『ホルター・ガイスト奇怪な宴』と異名を取っています。以後お見知りおきを」

こいつは殺気がないんじゃない。殺気なんて必要なく、ボタンを押してテレビ画面の中で剣を振るうように、人を殺せるんだ。

「んふっ……」

動けたのはただ1人、

「ふふっ あははっ！ いいぞ、私はずっとこんなシチュエーションを待ってたんだ！」

寒気の走るような狂気じみた声が夕暮れの公園を染め上げる。幾月がむくりと上体を起こす。血まみれで立ち上がる。

「まだ立ちますか、流石ですね」

『奇怪な宴』はシーソーを分解して部品の1つを幾月に投擲した。べきい　と鋭いのか鈍いのか不思議な音が鳴って幾月は、金属で出来たそれを受け止めて握り潰した。

「片手で止めた……？」

無造作に力を失ったシーソーの部品を投げ捨てる。黒くて黒い黒を纏った幾月は長い刀を死神の鎌のように翳して君臨する。

「さあ、殺し合おうじゃないか」

戦闘狂——それは『暗くて深い漆黒』のある一面を表す上でもっとも正しい表現で間違いないだろう。

そもそも彼女がゴブレットに手を貸したのは同情したわけでもなんでもなく『大量破壊兵器底無しの聖杯』など使われては戦争が楽しくないからなのだ。

『奇怪な宴』は嘆息しながらもどこか歪に微笑む。

ゴブレットが薄く唇を噛む。壮介はゴブレットを止めようとは思わなかった。

彼女こそが渦中なのだから彼女は闘うべきなのだと思っていた。しかし二人が動き出そうとした瞬間、

「そこで黙って見ていてください『底無しの聖杯』」

それはゴブレットが呼吸をするまでのほんの一瞬だった。

そのわずかなあいだにブランコは鎖といくつか鉄骨に。滑り台はただ強大な鈍器に。

動物を模した遊具は砲弾と化してゴブレットの真上に配置された。

ゴブレットが無力化能力を用いればそれらは即座に、無慈悲に、壮介とゴブレットを破壊するだろう。

「『決闘』を始めましょう」

宣告と共に二人の『魔術師の最終』は動き出した。片方は後ろへ、片方は前へ。

『奇怪な宴』は最強の念動力使いだ。テレキネシス生物以外の物体に触れずに動かすことが出来る彼の持つ戦法は実に多彩である。『奇怪な宴』に対して『暗くて深い漆黒』の戦術はあまりにも無骨で単純極まるモ

ノしか存在しなかった。

突撃。

幾月の射程距離は元の刃の2 m弱に魔術による3倍の延長値を加えた約8 mだ。それよりも近づかなければ、またその内で刀を抜かなければ幾月は相手を倒すことができない。

『奇怪な宴』は圧倒的な射程距離を持っている。少なくとも彼を中心に半径50 mくらいの物体は自在に動かすことができる。

ズボオ と公園の各所で樹木が根元から引き抜かれた。無数のそれが飛来し幾月に突き刺さる。遊具が解体された鉄骨がありとあらゆる方向から嵐のように降り注ぐ。

(次元が違う……)

壮介は思う。

『フレイム・ベル
炎を呼ぶ鐘』

『グラトニー・ゴブレット
底無しの聖杯』

『ブラック・ブラック・ブラック
暗くて深い黒』

壮介はその他にも何人かの魔術師を見た。だが『奇怪な宴』の攻撃力は根本からそのどれとも次元が違う。

これが本当に本気の『魔術師の最終』の力……

しかし、

「これだけ当てて倒れませんか…… なるほど『桁外れ』とはよく言ったモノですね」

押されながらも、吹き飛びながらも、幾月は倒れない。

『奇怪な宴』のテレキネシスは時速60〜80 kmの速度で間断なく放たれている。鉄骨ならば人体を貫ける速度だし、樹木のような接地面積の大きいモノでもその衝撃は内部を破壊するに十分な攻撃力を持つはずだ。『奇怪な宴』は自分の魔術がとてつもなく殺傷向きのモノだと自覚している。

それが、殺せない。

なんらかの防御術式を用いているとしか考えられなかった。

しかし『存在』使いである幾月は一体何の存在を強化しているのか。あの黒い装甲は何なのか――

（黒い……？）

閃くモノがあつた。

まさか、とは思つたが一度思い浮かんでしまえばそれ以外には考えられない。

（あの黒の正体は血、ですか……？）

例えば血液の持つ凝固作用を強化してるとしたら。

『暗くて深い漆黒』クラスの魔術師ならば血小板程度のわずかな凝固作用でも装甲のようにできるのかもしれない。

だから彼女は出血のない段階の一撃目を防ぐことはできなかったのではないだろうか。

だがそんなことが可能なのか――？、と考え始めたあたりで『奇怪な宴』は思考を打ち切つた。無意味だからだ。

実際にテレキネシスを用いた投擲、打撃では幾月の進撃を止めることはできない。結局のところいま必要な理解はそれだけだ。

「――自分も奥の手を見せざるを得ないようですね」

呟いた『奇怪な宴』はどこか嬉しそうだった。それはきつと彼もまた並の相手では強力すぎる自分の力を存分に振るうことができないからだろう。

『暗くて深い漆黒』が刀の間合いに入る。刃の存在が延長、強化される。

『奇怪な宴』が大きく両手を広げる。強力なテレキネシスの力場が広がる。

そして二人は、

「――よせ」

同時に動きを止めた。互いの魔術を恐れたからではない。電灯の上に立つ一刹那前まで確実に居なかった魔術師の存在を認めたからだ。

「ガブリエル」フォール……」

『奇怪な宴』は呟いた。

「『ライトニング・デス雷と等速で訪れる死』だと……？」

『暗くて深い漆黒』は刀をわずかに下げた。

「……」

灯りの上に立つ第一位『雷と等速で訪れる死』は彼女らを軽く見下ろして抑止した。

「よせ。『底無しの聖杯』に価値はなくなった。この争いは最早無意味だ」

「……なぜです？」

「第4位が死んだ、殺された」

二人は息を吞んだ。ガブリエルは淡々と続ける。

「これを引き金に戦争はすぐにも始まるだろう。もう悠長に『底無しの聖杯』を調律しているひまはない」

「ウソ……？ お師匠様が……」

ゴブレットを見下ろして軽くうなづく。

「事実だ。『ホワイต์・アウト消失』はもうこの世にいない」

ゴブレットが力なく膝を折って尻餅をついた。

ガブリエル「フォールは恐ろしく抑揚のない声で続けた。

「『底無しの聖杯』、敵を倒さなければ味方は死に続ける。お前の在り方をもう一度よく考えてみてくれ」

第4話：不協和音

ガブリエルはそれだけを伝えるとすぐに消えた。音もなく一瞬で本当に消えるように居なくなつた。

（どういう原理なんだあれ……）

『奇怪な宴』は背を見せた。

「目的もないのに戦うほど自分は戦闘狂ではありませんので」

と言いつのまま去つて行つた。幾月も「興が削がれた」と彼を引き留めはしなかつた。それが壮介にはかなり意外だつた。

ともかく『底無しの聖杯』に追われる理由はなくなつたようだ。

しかし彼らは満足に喜べなかつた。

冴垣 壮介は無力感から、

幾月 アサギは脱力感から、

グラトニー「ゴブレットは……」。

「ほんとに死んじゃつたのかな、お師匠様……」

壮介の家に引き上げた三人のうち壮介とゴブレットはベツタリとテーブルに頬をつけていた。生きた心地がしなかつた。『奇怪な宴』はその気になれば彼らを瞬殺できた。そのイメージが焼きついて離れない。

「お前を連れ戻すためのハツタリではないのか」

全身アザだらけ傷だらけの幾月が包帯を巻きながら言う。長い肢体と小ぶりだが形のいい胸部の下着姿を堂々と晒しているが壮介もゴブレットもテーブルに寝そべっているからそれに気づかない。

「あんまいい加減なこと言うなよ」

壮介が咎める。幾月に小さく首を横に振つた。

「というか私にも信じられんのだよ。一度手合わせしたことがあるが第4位は私よりも強い魔術師だ。そのレベルの魔術師が殺された、となるとな」

「……」

おーどれおーろかもーの「はい」

幾月はバックを開いて携帯電話を取り出す。

（なんだいまの着ウタ……？）

思いながら幾月を見て、噴いた。

「……わかった。すぐ戻る」

幾月は特に気にする様子もなく携帯電話を切ってバッグに直す。

「『魔術師の最終』に収集がかった。私は一度本部に戻るよ」

「……、……、……、」

「ん？ どうした？ 少年」

ようやく壮介の様子がおかしいことに気がついたゴブレットが幾月と壮介のほうを見た。

「キャ……」

小さい悲鳴を挙げて飛び上がるゴブレットと壮介に、

「そんな堂々とサービスシーンやってんじゃねえ！」

幾月は救急セットと一緒に部屋から叩き出された。

「あー……びつくりした」

意外にも幾月がすぐ女らしい体つきだったことに、ではない。

うん、絶対違う。

「そーすけのバカ……」

そしてゴブレットが恐い。獲物を狙う猫のごとき気配を放っている。

が、元々温厚な性格である（と自分では思っている）ゴブレットの怒りは長く続けなかった。

「……ねえ 壮介」

「ん？」

「わたしも、本部に行こうと思うんだ」

「このタイミングでか？ そっちのことはよくわからないけどまだ時期的にまずくないか？」

「かもしれないけど友達とかにちゃんと無事でしたって伝えたいし、

それに……」

表情は不安そうだった。なのに言葉だけは力強かった。

「真偽は自分で見極めたいんだ」

「……帰ってくるよな」

しみみりする壮介をゴブレットは怪訝そうな顔で見る。

「な、なんだよ？」

「一緒に来てくれないの？」

「……え、」

魔術師のアジトだろ？ 俺なんか行っていい場所なのか？ だのいっぱい疑問が沸いてきたが結局言葉になったのは一言だけだった。

「あ……じゃあ、行く」

「壮介、そういうプレイするにはお前はまだ若すぎると思うぞ」

朝方になってようやく帰宅してきた父親は開口一番に言った。隣に立つ幾月は親父の上着を着ていたが丈が足りずに下着が隠し切れていない。もう一度言うが幾月は傷だらけアザだらけである。

「幾月……」

「アサギでいいと言っただろう、少年」

幾月はニヤリとした笑みを浮かべながら意図的に誤解を誘う。

親父もわかつている節がありながら乗るから夕チが悪い。

「ところで本当に事情がわからないんだが」

「あーはいはい、かくかくじかじかでな」

「なるほど、壮介は天才だな。かくかくじかじかで人にモノが伝わると思っているのだから」

めんどくさいなあと思ひながら壮介は幾月を、次にゴブレットを見た。

二人とも気だるそうに視線を逸らしやがった。

「……ふーん、なるほどなあ」

事情を話すと親父は思慮に耽るように顎に手をあてたがあれがポ

「ズだけであることを壮介は知っている。この父親が考えてモノを話すところを壮介は見たことがない。」

「ぶっちゃけ反対だ」

「え、」

「お前は俺の息子だからな。親としてはあまり得体の知れない場所にはやりたくない」

普通の父親のように真っ向から心配されてしまっただけで驚いた。父親の視線はゴブレットを追う。視線が合う。ゴブレットは小さく目を逸らしたが親父はフツと笑った。

「だがお前がどうしてもと決めたことならば俺に反対する権利はないと思う。行つてこい」

「つて快く送り出されたはずが、お前らは何をやってるんだ……？」

ゴブレットと幾月は壮介の部屋の扉に変な紙をペタペタと貼り付けている。

「なに 君に少しおもしろいものを見せてやろうと思ってな」

「道を作ってるんだよ」

「道……？」

「さて、こんなとこかな」

ゴブレットが手のひらを扉に付けてブツブツとなにかを唱え始めた。

「詠唱だよ、テレビゲームなんかではよくあるだろ」と幾月が補足する。いままで長い言葉を媒介にする魔術をあまり見なかったせいか少し違和感がある。

「アバカム！」

「待てっ いま超絶バツタモンの呪モ——」

壮介達は光に吞まれて消えた。

『星の见えない王城』
ホロウバステイオン

若干（かなり？）の皮肉を込めて呼ばれる“こちら側”の魔術師の本部である。

所在地は不明。通行証を持つモノだけが『扉』を通して入ることができる謂わば隠れ家だ。

敷地面積は城下町を含めて10万平方キロメートル超で一般的な街の風景に＋して『王立魔術学園』やら『鍊金術館』やら『魔導図書館』やら魔術師っぽい建物が時々見受けられる。

風のない街だな、と壮介は思った。日本では蒸し暑い熱風が肌に気持ち悪かったがここは春の日差しに似た柔らかい暖かさがあたりを包んでいた。

ってゆーか、

「どこの国だ、ここ……」

外觀がひどくちぐはぐでほとんどの建物の国籍が統一されていない。煉瓦作りのすぐ横に木造の家があったりしている。

隣で幾月が「我々も知らんよ」と軽く答えた。

「魔術師の誰に訊いてもおそらく同じ答えが帰ってくるだろうな。敵対勢力の侵入を防ぐためにこの場所の情報は誰にもあかさされていないんだ」

「へえ……」

「已む無く巻き込んだ一般人を召喚するときのために通行証を持つ魔術師の同意付きならば入ることはできる。もつとも魔法世界の説明をして説得するよりも口封じのほうが簡単だし一般的なのも事実だが」

壮介はきつと彼女はゴブレットが出した『決闘』の条件に壮介達に手を出さないというのがなければ自分を殺していたんだろうなあ

と思った。

「――恐らく君の想像通りだ」

壮介は苦笑いする。

幾月は壮介の反応に満足そうに口端を吊り上げてからわざわざ表情を作り直した。

薄々気づいていたけど、改めて思う。

こいつ、性格悪い。

「さて、私は『城』へ行かなければならないが君たちはどうするんだ？」

壮介はゴブレットを見た。

ゴブレットは売店で売っているお菓子に気を取られていた。

「ゴブレット」

「え、あこ、コホン」

わざとらしい咳払いが無意味に微笑ましい。ゴブレットは少し頬を赤くする。

「あの、お師匠様のアカデミーに行こうと思うんだ」

「そうか、そういえば第4位は学校の講師だったな」

「……ちなみにゴブレット、ここで日本円って使えるのか？」

「うん 世界中どこの通貨でも価値を算出して使えるようになってるよ」

無駄にハイテクだな…… 感心しながら壮介は千円札を一枚財布から抜いた。

「そんなに欲しいなら買ってこい」

さつきから心ここに在らずだから。

「いいの?!」

千円札を引ったくるゴブレットの表情はキラキラしていた。離れていく背中を見ながら別に無理して明るく振る舞う必要もないのと思う。

さて、

壮介はクイクイと幾月の袖を引いた。ゴブレットに聴こえないよ

うに小声で言う。

「なあ アサギ」

「なんだ？」

「ガブリエル」フォール、ってやつはどんな魔術師なんだ？」

壮介にはあの状況で幾月が刃を納めたのがなんとなく理解できなかった。それぐらいあのときの幾月は恐かったのだ。

幾月は明確に顔をしかめた。

「どんな、か。そうだな…… 私と『奇怪な宴』を1秒かからずに瞬殺できる魔術師だ」

「へ……？」

『魔術師の最終』とかいうトップの13人のうち2人—— 13人の第13位である幾月はともかく第3位のあの男を、瞬殺……？

「少年は自分の命を誰かに握られる経験をしたことがあるか？ おそらくないだろう。あいつの前では闘志も殺意も何一つ残らず意味を無くしてしまう。だから私はあいつが嫌いだ」

とにかくとんでもない魔術師らしいことはなんとなく理解できた。

「……じゃあもう一つ」

「少年は疑問が多いな。まあいい答えてやろう」

「ゴブレットの中のエネルギーを使うには時間がかかるのか？」

幾月は顎に手を当てる。系統の違う魔術の話になって記憶を探っているんだろう。

「……そうだな。おそらくかなりの長期に渡るだろう。グラトニー

「ゴブレット自身が拒絶しているからな。これは意思の問題だ」

「意思？ 心を壊すのってそんなに難しいものなのか？」

「いや なんとというか…… 他者に対する魔力の介入というのはいろいろと条件があるんだが、」

「いや」

背後からの声が笑い混じりに幾月の拙い説明を捕捉した。

「ただ心を壊すだけならいろいろ方法はあるさ。ただゴブレットちゃんのエネルギーを敵に向けてぶっぱなしたいって思考を植え

つけなきゃなんない。魔力の性質と聖書側全体を敵に回してでも逃げ出したゴブレットちゃんの決意的に一年二年はかかるっぽいかね」
壮介は振り返って彼を見た。茶髪で整った人懐っこい顔立ちをした若い男。枯れ草色のコートにXIEIと書かれた刺繍が妙に目立つ。
「へえ 詳しいんだなあんだ」

「……自分の技の核をそんなにあつさりと教えていいのか？ 第12位」

「え……」

男はにっこりと笑った。

「にはやはっ そゆわけで、俺っちこと『マジシャンズ・セレクト唯一の選択』をよろしくう！」

「思考操作系魔術のトップだ」

幾月があまり愉快そうでない声を出す。

そんな解説を聴かされたあとでは壮介はうまく笑顔を作ることができなかった。

『唯一の選択』だけが陽気に話す。

「噂は聴いてるぜ、少年。魔術抜きで『暗くて深い黒』に『炎を呼ぶ鐘』を退けたんだって？」

ジロリと幾月が男を睨むが気づいた様子はない。むしろ気づいてしまった壮介がビビる。

「いや そんな大したことは、」

「謙遜すんなって。『暗くて深い黒』はもちろん『炎を呼ぶ鐘』だって若手の中じゃ成長株なんだ。誇っていいことさ」

「はあ……？」

といってもゴブレットの能力で魔術を封じて肉弾戦に持ち込んだだけなのだからマジで誇れるモノではないと思うのだが……

「つーわけで今度あんたも弄く」

「わーわーフェイト、行くぞ」

『暗くて深い黒』が首根っこを掴んで跳躍した。ざっと10mくらい。

「ちょ、アサギさん?! この高さ落ちたら死…、死ぬうう!!」

……途中でなにを言おうとしたんだろう、あの人は。

フエイトと呼ばれた魔術師は幾月に掴まれたまま屋根伝いにピョンピョン飛び跳ねて離れて行った。

「どうかしたの? 壮介。あれ 幾月は?」

お菓子袋を抱えながら戻ってきたゴブレットに壮介は「なんでもねーよ」と言った。

なんだか着いたばかりなのにひどく疲れた気がする。

学校に着いた途端に二人は子供に囲まれた。『魔術師の最終』の第4位という肩書きを持っているからには大きな大学か何かで専門分野をみっちり教えてるイメージを持っていた壮介はなんだか拍子抜けしてしまった。木造二階建ての校舎はどこからどうみても田舎の廃校寸前の学校のようなだった。

けどこれはこれでいいものかもしれない。子供達は誰も彼も明るそうな顔つきをしてる。やたらひねている同級生を1人思い出して彼らと比べ、壮介は自然に笑みになった。

「あー、ねーちゃんだあ!」

「キンパツせんせーだあ、帰ってきたんだあ」

「となりのなに? かわいい?」

壮介はキンパツ先生に嘔いてゴブレットにこめかみを殴打された。えっと、その、エルーを呼んできてくれる?」

というゴブレットの声は子供達の喧騒に紛れて誰の耳にも届かない。

困り顔でゴブレットは壮介を見たが壮介は手を横に振って自分にはどうしようもないことを示した。

「こら、あまりゴブレットを困らせるな」

入り口のところから聴こえたしわがれた声で子供達は一斉に押し黙る。

杖をつきながらゆつくりと歩いてくる老婆は魔術に疎い壮介でもわかるような不思議な威圧感を持っていた。

「誰か、エルメスを呼んできてくれるかい？」

「はい 僕が行きます！」

1人の男の子がきりと駆けて行く。老婆はその後ろ姿を見送ってから優しい声を出した。

「他の子は勉強に戻りな。ゴブレットとはあとでゆつくり話せばいいだろう」

子供達は元気に返事をして騒がしかったのが嘘のように大人しく校舎の中へ戻って行った。

壮介は単にゴブレットがナメられてるだけなんだろうかと隣を見て、叩かれた。

「最近ちよつと壮介がなに考えてるかわかってきた……」

ゴブレットは浅く睨みつける。

老婆が静かに笑みを噛み殺す。ゴブレットは彼女に向き直って一礼した。

「お久しぶりです。『キリング・ノイズ不協和音』様」

「かしこまらなくてもかまわないよ。あたしが『魔術師の最終』だったのはもう40年以上も前の話だからねえ」

（元『魔術師の最終』……）

威圧感の正体が少しわかった気がする。幾月や『奇怪な宴』を目の前にしたときと同様の――、寒気だ。熟練の魔術師だけが持つ独特の気配だろう。

「あら？ その子は魔術師じゃないね」

「あ はい」

「いい声だね。いい面構えだね。惜しいねえ、あと30歳食ってればあたしが相手してやってもよかったのに」

イヒヒといじ悪く笑う。壮介は第一印象を食えない婆さんとした。「それでゴブレット、今日は――ああ あの話かい？ あのパカが死んだそうだね、まったく死ぬならもつと人様に迷惑かけないよう

にしねってんだ。第4位なんて大層な名前いただいてるうちに死んでんじゃないよ」

それは辛辣な口調ながらどこか悲壮感が消えていなかった。だが次にはもう声に感情が失せていた。

「だけどね、ゴブレット。あんたはあの子がほんとに死んだと思ってるかい？」

「……え？」

「仮説の一つだ」

『不協和音』は笑みまで消しさる。

「あの子が上層と結託してあたしらを裏切ってたらあんたはどうする？ ミハイルあたりは怪しいね、あの子の死を切っ掛けに戦争が加速して利益になるような連中と組んで一芝居打ったとしたら？ その条件がここを潰させないことだとしたら？」

「そんなこと……」

「あたしはあの子ならやりかねないと思ってる。上層つてのはとにかく汚いのさ。いまの『魔術師の最終』達が上のやり方に反発してるのは知ってるだろ？ 高い魔力と反抗心を持つ彼らは上層にとっちゃとんだ目の上のたんこぶだ。戦争で彼らを駆逐して自分達に従う都合のいい魔術師にすぐ替えようって考えても、おかしくはない」

一度言葉を切って軽く息を吸う。

「まっ 少なからずあの子が生きてて欲しいあたしの願望が入ってるがね。」

エルーが来たようだ。悪かったね つまらない話を聴かせて。年寄りはこのへんで退散するとするよ」

「あ…… あの……」

ゴブレットは何か言いたそうだった。結局「はい」と小さく俯いた。

「……気をつけな。『底無しの聖杯』なんて嫌な看板背負っちゃったあんたにも、必ず火の粉は飛んでくる。あとあたしを巻き込むことに気兼ねするんじゃないよ。あたしゃひまなのさ。今度から逃げ

るならあたしのところに飛び込んできな」

去り際に笑みを取り戻した老婆はイヒヒと人が悪そうに笑った。

「それじゃあエルー、あとは頼むよ」

入り口のほうに向けて言うのとドタドタと騒がしい足音が聴こえてくる。壮介とゴブレットはそちらを見た。

「ゴブレット！」

「エルー！」

そのまま藍色がかった長い髪の女の子がゴブレットに飛び付いた。小柄だがゴブレットもそう大柄ではないので抱き留めながらも支えきれずによろける。

『不協和音』が後ろ姿で「あたしもあれやればよかったかね？」と呟いたのが聴こえて壮介は苦笑する。

11人の魔術師と1人の老人が円卓を囲んでいた。

老人の名はミハイル。エクスカリバー。アロス。ライヤン同様『上層』の一人であり誰よりも『魔術師の最終』の力を知りまた誰よりも『魔術師の最終』を嫌う男だ。

「第11位はまた遅刻か」

ガブリエルが言う。

「いいから始めちまおうぜ。退屈で仕方ねえ」

数人がそれに頷いて老人が厳粛な声を出して議会の開幕を宣言した。

11人の最強の魔術師達の視線が老人に集中する。

「4位が死んだとのことだが、詳細はまだ調査中である」

調査中…… 聞こえのいい言葉だな。と幾月は思う。果たしていつになれば調査は終わるのか。

「別に誰が死のうが代わりを立てりゃあいだけだろ」

白髪の青年が興味なさげに言う。それからニヤリと嘲笑するような笑みを作った。

「ついでにその四桁に負けた二桁も変えとくか？」

「……つまりお喋りに付き合っている気分ではないな」

幾月はとりあえずそれを受け流すが彼女もまたそんなに器用な性格ではない。

「そうだろうなあ？ 負けて傷心中だもんなあ、幾月ちゃんはやオ」
「少し黙れ その首撥ねて欲しいのか？」

呆れたような口調だが内心で腸が煮えくり返っていることは周囲には丸わかりだった。おいおいそのへんにしといてくれよ…… と第8位は思うが青年はさらに挑発する。

「はっ できもしねえことをグダグダとほざいてんじゃねーよ『暗くて深い黒』 テメエこそ潰すぞ」

幾月は刀を構えた。青年が掌を突き出す。一触即発の空気の中でぶっ と誰かが噴き出した。

「ぶっ……くくっ あははははっ 『桁外れ』を相手にそれが、流石は『恐れを知らないゼクト』かな」
ファイアレス・ゼクト

幾月と青年は渋い顔で同時に彼女を見た。腹を抱えて爆笑しているのは第6位『火の風』だ。
ベクトルストーム

だからお前は気に食わないんだ、と思いながら二人は薄れた苛立ちを彼女に向けた。

「……話を進めて構わないか？」

ブイツ と青年と幾月は同時に顔を背ける。その他の魔術師達は苦笑する。子供ように喧嘩するこの二人が『桁外れ』と呼ばれる処刑人と魔術師最凶と恐れられる第2位なのだから魔術はわからない。第6位はまだ腹を抱えている。

「我々は『消失』の調査対象としていた魔術師団を敵対勢力と認識

し『魔術師の最終』の発動を要請する」

ミハイルは言った。
ホワイトアウト

『消失』のついていた任務は破壊工作を目論んでいる可能性があった魔術師団の内部調査だ。『消失』はあらゆる光を騙す。肉眼はおるかモニターの先にすら介入し自身に対する不利な情報を“消失”させる。

それを発見し撃破した魔術師団との戦闘――、幾人かはごくりと唾を飲んだ。もう幾人かは笑みを浮かべた。残りは固く視線を固定して何かを考えていた。

「人員は？ まさか全員を動かすわけではないでしょう」

『奇怪な宴』が訊ねるとミハイルはゆっくりと頷いた。

「『雷と等速で訪れる死』、『奇怪な宴』、『唯一の選択』、『ミハイル』エクスカリバーの名の元にこの三名を推薦する」

多いな、と『奇怪な宴』は思う。単独で他を圧倒する力を持つ『魔術師の最終』を、しかもその1位と3位を同時に動かす事態など何十年振りだろうか？

（そもそも第4位が殺されている時点で異常事態ですか まるで戦時中ですね）

隣で『恐れを知らないゼクト』が舌打ちした。自分が選ばれなかったからだろう。9、10位あたりが安堵したようにホッと息を吐く。こちらもあり自分が選ばれなかったからだろう。

「異論はない」

「自分もです」

「俺も」

三人の顔を一つずつ見渡してからミハイルは小さく頷いた。動作がとろくて無性にゼクトのイライラを掻き立てる。

「『唯一の選択』なんてドカスを選んで俺様を選ばねえんだか」

悪態をついたゼクトに第12位は「ははっ……」と苦笑するしかなかった。実際戦闘能力には天と地ほどの差があることをフェイト自身がわかっている。

「では、他の者にも任務を言い渡す。ただし第2位のみここに留まることを命ずる」

「はあ?!」

ゼクトが強く机を叩いた。魔法技術を集約して作られた円卓がバキリとへこむ。

「察するに護衛役かな? よほどのことがない限りここは安全だと思うけど」

第6位の問いにミハイルは

「万全を期す。ただそれだけのことだ」とだけ答えた。

「ざけんなよ。俺がこの場で死なしてやろうかクジジイ!」

激昂するゼクトの首筋に幾月が全長8mに及ぶ刀の切っ先を突き付ける。『火の風』がゼクトに掌の内が見えないように手に向ける。彼女の攻撃魔術の予備動作だ。

「俺様と殺り合うか? いいぜ。飽きるまで殺戮してやる」

しかし『恐れを知らないゼクト』はその程度では恐れない。第2位の座は伊達ではない。この場でやりあえば被害は彼ら3人だけに留まらないことは容易に想像がついた。唯一ゼクトの抑止力となる力を持つ第1位、ガブリエル・フォールは傍観している。

いつもならゼクトを諷めるのは彼女の役目なんだがな、と思いつながら幾月は嘆息した。

「……いい。私が代わろう。ミハイル、それで問題はないか?」

「いいだろう」

ミハイルは幾月の提案をあつさりと飲んだ。少し怪訝に思う。

(しかしこの街での護衛なんて下手をすれば何も無い任務で退屈嫌いのゼクトがキレることなんかわかっているだろうに……)

幾月はあらためてミハイルを見たが老獪な老人からは表情がまるで伺えなかった。

第4話：不協和音（後書き）

ホロウバステイオン っていうのがディズニーのなにかに登場する城の名前だと思ってたらキングダムハーツオリジナルらしいけども
うごり押しすることに決めましたm（――）m

第5話：かくかくじかじか

「もオ 心配したんだよお」

振り返ると藍の髪の少女はグリグリとゴブレットに顔を押し付けていた。困惑顔のゴブレットも友達とまた会えたことが嬉しそうに見える。

「んでそちらは？」

急にエルメスが壮介をり向いた。

「冴垣 壮介ッス、よろしく」

エルメスは「まじまじ」と口に出して壮介をじっくりと眺めたあと、

「ふーん ゴブレットってこういう子が趣味なんだ」

好奇心を隠さずに言った。

「な……」

「へ……」

「いーのよわたしにはちゃんとわかってるからゴブレットが男連れてくることなんてこれまで「わーわー、なに言ってるんですかエルー！」

慌ててエルメスの口を塞ぎにかかるゴブレットがエルメスはひよいとゴブレットを避けてあることないこと喋り続ける。微笑ましいなあと壮介は思う。

「そんなことより！」

「わかってる。お師匠様のことね」

急に真面目な声になられてゴブレットはなんだか感情のやり場を無くす。が、ゴブレットも魔術師の顔になった。

「お師匠様がゴブレットをどれだけ溺愛していたかをわたくしの全員全霊を持ってそちらの彼にお伝え、

「しなくていい」

あーはいはい、といなすように手を振ってエルメスはあらためて

切り出す。

「あなたが欲しいのはお師匠様が向かったヨーロッパの魔術結社の情報ね？」

コクリと頷く。

「あたしのどこに届いたお師匠の調査資料によると結社の名前は『ミスリル』

一応錬金術師のギルドの末端に名を連ねてるわ。破棄された施設を隠れ蓑にして使ってたみたい。結社名に“存在しない金属”の名前なんて使ってるくらいだから元々は神鉄の研究か何かをやってたんじゃないかしら？ 法を犯すような研究もありそうね。

構成員は30人弱、中規模ね。面子は数人は偽名だからはつきりとはわからないけど少なくとも有名どころの魔術師はいないわ。三桁の後半から四桁つてところね。ただし、

いい辛そうに目を伏せてから一度壮介のほうを見る。壮介も視線を返した。ゴブレットが俯いたことに壮介は気づかなかった。

「禁書側との繋がりが存在する可能性あり」

「……きんしよがわん？」

・・・、と数秒呆れたような沈黙のあとにエルメスは合点する。

「あなた、魔術師じゃないの？」

「あ、ああ」

「へえ」

興味津々なエルメス。壮介はふと『不協和音』はなにを基準に壮介が魔術師でないとわかつたんだろうと不思議に思った。

「まっ いいや、禁書側つてのは…… っていうかわたしたちの魔術は基本的に天使や聖霊の力を借りるモノだとされてるの」

天使？ 聖霊？

「ありとあらゆるモノに存在する聖霊達に力を借りるのがわたしたちの聖書側の魔術、それに対して禁書側は悪魔や悪霊を使役して魔術を使うの」

悪魔？ 悪霊？

「この2つが長いことずっと対立しててね、あちこちに火種が燦りまくってるのよ。その1つが今回暴発したってわけ」

随分眉唾な話が出てきたなあと壮介は考える。

幾月は存在を強化する魔術師だと言っていた。天使や悪魔の力とは何の関係もない気がする。魔術師がいるというんだからやっぱり居るんだろうか？

「それでゴブレット、あなたはどいうするの？ まさか現地まで乗り込んで『ミスリル』の調査をする、とか言わないわよね？」

「うん そのつもり」

「……………」

ゴブレットってもしかしたらアホなんじゃないだろうか二人は思った。

たしなめようとしたところに別の声が割って入る。

「流石にやめたほうがいいな」

三人が揃って声のしたほうを見ると黒い服を着た2m近い刀を持つ長身の女がいた。

「え………… この人って、」

「………… うん『暗くて深い黒』だよ」

エルメスの表情が目に見えて引き吊る。気にせず幾月は話す。

「ミスリルの件については『魔術師の最終』が動くことに決まった。ガブリエル、フォールを含む3人の大盤振る舞いさ。上は徹底的に禁書との繋がりを潰すつもりらしい」

「会議は終わったのか？ 早いな」

「まあな。実はかくかくじかじかでな、私は護衛としてここに残ることになった」

「説明がめんどくさいからってかくかくじかじかではしよるな」

呆れ顔で言う壮介を幾月は軽く笑い飛ばす。

エルメスは「なにあの子 普通に喋ってる すごくない?!」とゴブレットを掴んで揺さぶっている。普通の魔術師に取って『魔術師の最終』とは雲の上の存在なのだ。

「そういう事情でやむを得ないから代わりの護衛をやると思う」
「は？、ゴブレットが追われるのは終わったんじゃない……」

幾月は心底呆れ返った顔をした。

「阿呆か、少年。『底無しの聖杯』を狙っているのが聖書側の魔術師だけだと思っていたのか？」

「え、」

「いやー『暗くて深い黒』が『底無しの聖杯』から手を引いたとわかれば禁書の魔術師共がわんさかやってくると思うぞ？ あー羨ましい。そちらは思う存分切り刻めるというのに私だけ退屈な上層の護衛だなんて」

壮介はエルメスに揺さぶられ続けているゴブレットに聴こえないように少し声を潜めた。

「……っていうかそれならゴブレットはここに残ったほうがいいんじゃないのか？」

「いつ手のひらを返すかわからない聖書側の本拠にいつまでも彼女を置いて置くほうが、安全だと君は言うのか？」

「っ……、」

「彼女もそれがよくわかって残るとは言わないのさ。まあ安心しろ、代わりの護衛は少々性格に難はあるが腕は立つ」

カチャ

扉を開くとそこは元の壮介の家だった。帰ってきたのだ。

「なんかスゲーとこだったな……」

「でしょ」

ゴブレットは少し誇らしげに笑う。

「お帰り、コンビ二弁当ならあるが食べるか？」

なにもないふつうの扉から出てきた自分達をふつうに迎えてくれた父親が改めてすごいと思った二人だった。

早朝だった。

ピンポーン

と、能天気インターホンが鳴った。

前にもあったよなあ、このパターンとか苦笑しながら壮介は扉を開けた。流石に扉を開けたら幾月が立っていた前みたいなことはならないだろう。

「……やあ」

「……」

条件反射で壮介は扉を閉めた。玄関の先には『炎を呼ぶ鐘』の異名を取る少年が立っていたからだ。

「誰？ 壮介のトモダチ？」

眠そうに目を擦りながらゴブレットがパタパタと駆けて来る。

壮介はとりあえず後ろ手に鍵を掛けた。

「いや うん、勘違い。そう 勘違いだ。うん。隣の家と間違えたんだきつと」

ピンポーン

「……」

沈黙。

「……壮介。ちゃんと出ないとダメだよ」

「ああ そうだな」

壮介は扉を開けた。

『炎を呼ぶ鐘』の異名を取る少年が立っていた。

ゴブレットは扉を閉めた。

「あはははは 二度も隣と間違えるなんてあの子もおっちょこちょいだね」

「ホ、ホントダヨナー」

顔を見合わせて苦笑いする。ガンツ！ と扉が向こう側から揺れた。

「ふざけるなよお前ら！ せっかくイクツキの頼みだからきてやるのに、帰ってやるうか?!」

「……………」

幾月もなにもこいつに頼むこともないだろうに…… 思いながら二人は扉を開けた。

『炎を呼ぶ鐘』は扉に鼻先をぶつけた。

「……『フランクス』所属、燃焼促進系砲戦型魔術師のジャック・クリーパーだ。イクツキからの依頼でお前らの護衛を引き受けた」

「……………」

「なんだか嫌そうな目だな？ ボクは別に帰ってもいいんだぞ」

「1つ、質問がある」

「なんだ？」

「お前 ほんとに強いのか？」

幾月から護衛は腕が立つとは聴いている。が、壮介とゴブレットは過去に彼を撃退しているのだ。ゴブレットの魔術無効化で肉弾戦に持ち込んだだけの話だが実際そういう戦闘になった場合、彼の小さな体は護衛として役に立ちそうにない。なまじ幾月の化け物じみた身体能力を目撃しているからそう思うだけかも知れないが。

ジャックは呆れた声で言った。

「とりあえず表で張ってた禁書の魔術師共は30人ほど焼き払ってきたがなにか問題はあるか？」

「男は泊めん!!!」

親父はジャックの姿を見ると堂々と宣言した。が、

「一月分だ。これでどうだ？」

「我が家と思っておくつろぎください」

ジャックが札束を持ち出すとあっさりと折れた。

「我が親がならんか情けなくなるな……」

壮介は額を押さえる。まあだいたい事情では人は金には勝てない。

「つていうかお前、あんな額の金…… いいのか？」

ジャックは一瞬ゴブレットのほうを見て彼女の意識がこちらになりを確認した。

「イクツキからの依頼金の一端だ」

「幾月が……？」

「どんな理由があるんだか知らないが、お前らのことは相当気にかけてるみたいだな」

ジャックは言ったがあお金はそんなことではないだろうと壮介は思う。

（壊した玄関と窓の修理代に + α …… かな？ どーせ金銭感覚壊れてるから多めに包んどいたとかそんなところか。

てゆーか金もってんじゃねーかあいつ）

「これで夢にまで見た憧れのシヨットガンが……！」
S P A S H 2

壮介はとりあえず父親をぶん殴って金を取り上げておいた。

「そついえばお前、飯はどうするんだ？」

「必要ない。お前達の世話にはならない。どっかで適当に食うさ」

「アホだろ、お前」

「……、？」

「お前はゴブレットの護衛役なんだろ？ だったら片時も目を離しちゃいけないはずだ！」

「……くっ 微妙に正論なのがム力つく」

「さあ、生意気いってないで俺に頼みこめ！ ご飯を作ってくださいとー！！！」

ゴブレットが隣で首を傾げた。

「……ねえ 壮介ってもしかして性格悪い？」

「ところでサエガキ ソウスケ」

「ん？」

「このカレンダーの印、今日の日付に始業式とあるが、これはいいのか？」

「……………あ、」

フリーズしたのが約三秒。

電速で動いた壮介が準備を終えるまでには三分かからなかった。

時刻は8時20分、走ればギリギリ間に合う……………かもしれないといったところだ。

「行ってくるっ！」

「あ、オイッ！」

ジャックは壮介を引き留めようとしたがすでに壮介の姿は曲がり角の向こうに消えていた。

ジャックは溜め息を吐く。

「あいつ、自分も狙われてるのがわかってるんだろぅな……………？」

「……………ねえ」

ジャックはゴブレットを振り返って嘲笑に似た笑みを作った。

「はいはい。わかってるよ、お姫様」

第6話：お前じゃなくてもできるんだ

「よお 冴垣」

校門の前で息を切らしている壮介の肩を誰かが叩いた。

「……神、乗 か」

しんじょう
すぐる

神乗 英、やたらとひねくれた壮介のクラスメイトで一応親友だ。ちなみにもう始業式が始まる時間は過ぎている。

この男は典型的なサボリ魔なのだ。壮介は神乗が真面目に授業を受けているところを見たことがない。

「お、前、式、は……」

「いいから先ず呼吸を落ち着ける。ほら、吸ってー 吐いてー」
息を吸おうとしたら噎せかえった。

「あ 今日光化学スモッグがどうたらこうたらで深呼吸したらダメな日だったつけ？」

「絶対、わざと、だろ」

親友は満面の笑みで「断じて違う」と言った。
もちろん壮介は信じなかった。

「ところで壮介はいまから式に出るのか？」

「ん？ ああ。俺はお前と違って真面目だから」

「ふーん…… 式終わったぐらいに教室行こうかと思ってたけど、壮介が行くなら俺も行こうかね」

こいつが他人に便乗？するなんて珍しいな と壮介は思った。

神乗はクラスを探せば一人はいる孤独が辛く見えないタイプの人間、馴れ合いの外にいて一人でなにかを楽しんでるようなやつだ。

善く言えば一匹狼。

悪く言えば根暗男。

「まっ とりあえず体育館いくか」

深く考えずに壮介は校門を潜った。春には鮮やかに花をつける桜が緑の葉と毛虫で出迎える。

足元に注意しながら校舎に入る。目的地の体育館は校舎のなかを通り抜けたほうが早いのだ。

普段遅刻なんてしない壮介にとって人のいない静かな学校はなかなか珍しい物だった。

廊下から生徒の話し声がしないのがなんとなく斬新に映って神乗にそんなことを話してみるが「へえ」と反応は薄い。

よくよく考えてみれば遅刻常習犯であるこいつは授業中で廊下に誰もいない状態を何度も経験しているわけだから、当然だった。

音のしない校舎を通り抜けて体育館に辿りつき少し躊躇いながら扉を開こうとした。神乗が壮介に体当たりした。二人の体が地面に転がる。

なにしゃがる?! って言おうとして鉄製の扉が吹き飛んだ音に拒まれた。

「立てっ、離れるぞ!」

反応するのは神乗のほうが早かった。

壮介は固まって動けなかった。

扉を吹き飛ばしたのが鉄製の大きな棒だったからだ。

(『奇怪な宴』……?!)

記憶と連想が壮介の足を固める。抗っても無駄なまでの力の差を思い浮かべてしまう。

「冴垣っ!」

対して親友は冷静すぎるぐらいに冷静だった。壮介の襟首を引っ付かんで死角に放り込むと一人で駆け出した。

範囲外に逃げられることを恐れたテレキネシス使いが飛び出してくる。

(『奇怪な宴』じゃない……!)

「待ってくれっ。俺はお前ほど足早くねえよ!」

テレキネシス使いは神乗の一人芝居に乗せられてそちらを追って壮介の視界を外れていく。

「っ…… なにやってんだ俺は」

体育館の入り口から中を覗くと何人が血を噴いて倒れていて半ばパニックを起こしかけていた。あの魔術師がなにが目的なのかはわからないが力と恐怖を用いて体育館を制圧していたことは想像がつく。

ここで壮介にできることはきつとなにもない。

壮介はテレキネシス使いを追って走り出した。

神乗 英は頭が切れるがあくまで常識人だった。

鉄骨ぶん投げるなんてどんな方法使ったのかピンとこないが、それなりに大型の装置を使わなければ不可能なはずだ。

そんな大きなものを使えない校舎の中ならどこからなにが飛んでくるかわからない外よりは安全なはず――

その読みは致命的に間違っていた。

テレキネシス使いがガラスに触れるとそこを中心にケーキを八等分したような亀裂が生まれる。

「つつつ……」

それが一直線の廊下を超速で疾走する。神乗は手近な教室に飛び込んでガラスの吹雪をかわした。大部分が腕を掠めて流血する。

（……ふざけやがって。なんだいまのは）

鉄骨をぶん投げたり

ガラスを意図した形に割って飛ばしたり

あきらかに人間が単体で出来ない行動だ。

（……まっ そんなこともあるんだろうな）

この世の全ては理論で出来ているがその理論の大多数は自分に解くことの出来ないモノだ。

神乗はそんな風がいい加減に納得することが出来る人間だった。だから上着を脱いでみた。

神乗を追い掛けていたはレンデルは神乗が逃げ込んだ教室に入っ

た。

窓が開いている。そこから逃げたのか？　と思っただが掃除用具のロッカーから上着の端が覗いているのを見て手近な机に手をかけた。同じテレキネシスの使い手でもレンデルは『奇怪な宴』に数段劣る。速度もパワーも低いし、彼は右手で直接触れたものしか移動させることができない。

だがそれでも、

ドガツ　と金属製のロッカーが破裂する。

それぐらいの力はある。

ロッカーから出てきたのは上着だけだった。

やはり窓から逃げたのか。

レンデルは窓を抜けて中庭のほうに駆け出す。

……それを足音で察して、少し時間を置いたあと神乗が教卓の下から抜け出した。フェイクを破った気になっている人間は注意力がわずかながら散漫になる。神乗はそこをついたのだ。

呼吸を落ち着けて携帯電話を取り出す。圏外、となっていて神乗は大きく舌打ちした。

「待てッ！」

冴垣　壮介は中庭を抜けようとしていたレンデルを見つけて叫んだ。

「なんだ。標的がわざわざそっちから現れてくれるとは手間が省けたな」

感情のない目をしたレンデルは壁際に寄ろうとする。

「オオオッ！」

咆哮をあげながら壮介は走る。

レンデルがガラスに触れる寸前、向かい側の教室からなにかが飛来してテレキネシスを発動させる前にガラスを砕いた。

「?!」

「イス放り投げるぐらいなら別にテメーじゃなくてもできるんだよ」
「っ……、」

壮介が間合いに到達する。レンデルが割れたガラスの破片を空中で掴む。

飛来。

だがその軌道は壮介にはバレバレだった。急所狙いの一撃必殺はあの嫌らしい親父の拳より遥かに読みやすい。

ぐわんと壮介の体が揺れて沈む。喉を狙っていたガラスが地面に突き刺さる。

近距離。繰り出される拳はレンデルが新しく投げる物を探すよりも早くて確に側頭部を撃ち抜き、コンクリートの校舎の壁とのあいだで脳震盪を起こさせた。

魔術師の体が壁に持たれたままズルリと落ちた。

「ははっ…… ざまあ見やがれ！ 誰がテメエなんかビビってるかよ」

壮介はひとしきり笑って、それからヘタレこんで息を吐いた。神乗が身を乗り出してこちらに歩いてくる。

「っておい！ 腕、傷だらけじゃねーか」

「お？ ああ、そういえば超いてえ」

傷自体は浅く出血はそれほどでもないようだが、とにかく神乗の腕は傷まみれになっている。

神乗の腕を取り親父がやっていたのを真似て着ていたシャツを破いて血管を圧迫しながら巻き付けていく。

「で、話して貰えるんだよね？」

神乗は立ってるのがめんどくさくなったらしく土の上にペタンと座り込んだ。

「……なにを？」

「惚けんなよ。お前、こいつの力を知ってんだろ？ じゃないと最後のガラスのあれは避けられねーはずだ」

こいつ、勘が鋭すぎる……
嘆息して壮介は事情を話始めた。

「……こいつらが襲ってきた事情までは知らんがそういうことらしい」

「魔術、ねえ。さっぱり信じられないけどたしかにそうでもなきや考えられねーな」

実物を目撃しているだけに神乗は呑み込みが早かった。

「携帯が圏外なのもそれと関係あんのかな？ まあ、こいつぶつ倒したからもう使えるか」

圏外？ ふつうに考えてテレキネシスにはそんな力は無さそうだが――、

「まずっ……」

悪寒を感じて壮介が振り返ったときにはもう死刑執行の間際だった。

屋上に立つ人影を視認した瞬間に黄色の閃光が視界のなかを駆け抜ける。

電撃使い――

咄嗟に屋内に逃げ込もうと足を動かすが遅かった。

秒速にして30万キロメートル近い雷の牙が壮介達に向けて放たれた、

「やれやれ…… そんなことじゃないかと思ったが」

――はずだった雷鳴は空中で大きく進行方向を変えた。壁にぶち当たったように下方向を避けて蜘蛛の巣状に空中を広げる。熱によって空気の密度が変化し電流が流れ易いほうへ傾いたのだ。

「にしてもよく生き延びたな。サエガキ ソウスケ。僕のなかでのお前の評価がバカからウマシカに変わったよ」

「……来るならもっと早くこいよ」

ファランクス所属三桁台の魔術師、『炎を呼ぶ鐘』のジャックII クリーパーがゴブレットを連れてほんの数メートル先に立っていた。

「さっさと倒して解決してくれよ護衛君。ってゆーか飯代ぐらい働け」

「……いや 距離がありすぎるな。僕の炎じゃああそこに到達するまでに逃げられる。それにさっきの雷は素人のソウスケ達に向けて撃ったものだから大した威力は持たせなかったが、次のは魔術師の僕に向けて撃つんだから威力はさっきの比じゃないだろう。」

気密操作くらいで防げるとは思えない」

「つまり？」

「絶体絶命」

「アホか！ なんとかしろよお前っっ」

「慌てるな。いまのはこの場にいる魔術師が僕だけならの話さ」

ジャックがゴブレットを差した。

ゴブレットの周囲に巨大なレンズが浮かび、光を跳ね返している。なにをしているのか壮介にはわからなかったが、上のほうで雷使いが膝について、倒れたのが臍気に見えた。

「……なにしたんだ？」

「光化学スモッグさ。今朝注意報が出たただろう？ 彼女は光系の魔術師だからな。空気中の光化学オキシダントを増量させるぐらいはわけないんだ。」

それを僕が雷を防いだときの熱波によって発生した上昇気流に乗せて上の魔術師のところまで運んだん、だ」

ぐわんと空間が歪んでジャックが倒れた。

第7話：剣と弓矢と銃と火と

「ジャック…… ふざけんなよ、お前強いんだろ?!」

容赦なく放たれた第二射を『底無しの聖杯』が無力化する。今度は壮介達にもよく見えた。景色を捻曲げて進む矢だ。真空に近いほど密度の低い空気を打ち出しているらしい。軌跡上を目で追っていくと百メートル程、離れた位置に黒い点がポツンと見える。

「…… ねえ、ふざけてないで早く起きてよ」

ゴブレットは呆れ返った目でジャックを見た。ジャックが上体を起こす。

「…… は？」

「グラトニー」ゴブレット、君には遊び心が足りない。もう少し慌ててそのアホを焦らせてやろうとか思わないのかい？」

(こいつ……)

ジャックは両手を叩いた。パン、という音がしない。代わりに開いた両手の間から炎が発生する。可燃物のない所にでも炎が発生させることの出来る魔術師はいまの所、ジャックしかない。

「さて、ボクはあいつを黙らせてくる。お前らはそこにいろ。下手に建物の中に逃げ込めば建物ごと崩される恐れがある」

「大丈夫？ 音と炎の君には真空使いは天敵でしょ……？」

「おいおい、四桁程度が誰に口を訊いている？ ボクは百二十一位『フレイム・ベル炎を呼ぶ鐘』のジャック「クリーパー」だぞ」

ゴブレットは「もう、知らない」とジャックに背を向けた。

ジャックは「挨拶代わりに一発行くか」と炎の塊を投げた。それはけして速くはなかった。ただ燃え広がる速度と質量が圧倒的で空間を埋め尽くす量で百メートル先の真空使いに殺到した。

壮介は開いた口が塞がらない。傍らに立つ少年が化け物レベルの魔術師なのだと今更認識する。

幾月は速度と威力で圧倒する近接戦闘のスペシャリストだ。

ジャックはその対極。リーチと物量で圧倒する遠隔戦闘のスペシャリスト。

「……ジャックはまだこんなもんじゃないよ」

ゴブレットがポツリと言った。

猛火を真空で防いだ。

とはいえ大規模な防壁を維持し続けることは難しい。弓なんていかにも遠距離戦用の武器を使っているが実は彼女は近距離型の魔術師だ。ともかくあの炎を相手に遮蔽物のない空間は危険すぎる。彼女は一先ず校舎の中まで走った。比較的低温らしい炎はコンクリートの壁を溶かすほどではない。が、校舎の中まで追尾してくる。防御しながら階段を駆け登る。追尾は大雑把なものらしく階段を登る彼女を真っ直ぐには追ってこない。屋上に上がって扉を閉めた。改めて、弓を構えようとして彼女は自分の敵の強大さを知る。

壁を垂直に登ってきた炎が四方から同時に彼女を叩いた。

跳躍、六階の高さから飛び降りるハメになる。ダンッ！ 熱波に焦がされながら着地。衝撃で膝をつく。弓を引く。目の前にジャックがいる。

「へエ……」

大雑把に炎を投げるならまだしも建物の中で追尾を行うならば術者が近くにいないなければならない。彼女の読みは当たりだった。放たれた矢は炎を突き抜けジャックの肩に命中する。

鮮血が噴き出すがジャックは顔をしかめただけで気にせず屋上から炎を引き戻し垂直に落下させる。彼女は後ろに跳んでかわす、六階から飛び降りた足は思うようには動かず避けきれずに蛋白質の焦げる匂い。地面を転がって火を消す。即座に弓を構える。彼女が構えた弓の軌道上に炎が球体上に集束する。

「禁書側“死手”の三十二番、『笹突き』であってるかい？」

「……そっか、君が十五に満たない年齢で聖書側三桁の百番台にまで到達した“怪物”ね」

「その呼び名はあまり好きじゃないな。本物の怪物共を知っている身としては酷く虚しく聞こえてしまう」

「この状態で私に話し掛けたのはどういう意図？」

「大した意味はないさ。ただ互いに詰みの一撃を構えてるんだ。殺した相手の思い出も残らないなんて虚しいじゃないか」

「本心？」

「もちろん嘘だ、僕が殺した人数はいちいち覚えてられるようなモノじゃないからね」

「……『篠突き』」

「『炎を呼ぶ鐘』」

女は弦を離れた。

ジャックは炎を破裂させた。

真空の矢が分裂、一本が四に増え四が更に十六に分割し六十四本の横薙ぎの雨になってジャックに飛来。

——リン、と鐘の鳴るような音がした。小さく抑圧されていた大質量の炎が解放。周囲の酸素を食いつくしバクドラフト現象を引き起こして炸裂し、六十四本の弓矢の雨の大半を消し飛ばす。

「跡形も残らなかった、……んなわけないか。逃げられたな」

ジャックは立っていられずに尻餅をついた。相討ちだった。爆風を透過してきた真空の矢はジャックの四肢を一本ずつ捉えていたし、ジャックの放った爆風と爆熱は浅くない火傷を『篠突き』に与えていただろう。

「僕もまだまだだな」

『篠突き』は既に校外に出ていた。というよりも爆風に吹き飛ばされていた。彼女の放った真空の矢は爆発の威力を大きく減衰していたが、それでも髪は焼け焦げ服は吹き飛び、酷い有り様だった。（直撃していたかと思うと……）

背筋を悪寒が貫く。魔術自体の相性の上では彼女の優位だった。それを押し伏せる圧倒的な質量と破壊力。火傷を負った四肢が痛む。
「……私もまだまだか」

「フォールさん」

紫電色の髪を持つ女が振り返る。

「『セレクト』か。何の用…… ああ、今日は調整の日か」

『唯一の選択』、思考操作系の最上位である魔術師は頷いた。

「ちやつちやと済ませちゃいましょう。ガイストを待たせるのもなんだし」

「……そーだな。お前には迷惑を掛ける」

「いえいえ、俺が『魔術師の最終』になれたのは半分以上がこのためですからね」

「……卑屈になるな。確かに直接的な戦闘能力ではお前は『魔術師の最終』では最弱だろうが、『直接的な戦闘』でなければお前に勝てるやつなどいない」

「ははっ、そう言ってくれるのはフォールさんくらいツスよ」

「退屈だな……」

幾月は時計台から街の灯を見下ろす。ここは魔術師の街、彼女が左手に握る刀を引き抜いて下の人間達を殺せばそれなりに強い相手は釣れるだろう。夜の闇に紛れてならば眼下にいる人間の四分の三

を逃げられる前に殺害できる自信が幾月にはある。

闘争の末に死ぬなればそれもまた一興、そういうふうに幾月は出来ている。しかし幾月は左手の死を降り下ろさない。もしそうすれば闘争にもならず、幾月は死ぬからだ。

ガブリエル「フオール

最強の闘争者たる『魔術師の最終』達の最強である第一位。彼女とは戦うことすらできない。全ての強さはあの女の『速さ』の前になんかの価値も持たない。『雷と等速で訪れる死』とは比喻ではない。『はあ……鬱だな。『ヴァジユラ』の暗殺者共でも襲ってこないものか』

そう呟いた瞬間だった。

こめかみの辺りに斜め下から強い衝撃を受けた。幾月は狙撃された。視界が揺れる。倒れそうになるのを片手について防ぐ。幾月のこめかみには既に血が固まっている。魔術の名は『暗くて深い黒』、血の凝固作用を“強化”して物理攻撃を無力化する、幾月の異名ともなっている術だ。

「……そこか」

幾月は笑みを浮かべながら時計台を蹴った。

四十メートル強、人間ならば確実に死ぬる高さだが『暗くて深い黒』の前には何の意味もなさない。地面の方はそうもいかずにドゴンと大きな音を立てて砕ける。狙撃手らしき男の背が見える。

しかし身体能力に特化した『魔術師の最終』である幾月に捕捉されて逃げ切れるはずもない。距離は詰まっていくな。

否、自分はどこかに誘導されている。

自覚しながら幾月は追跡をやめない。ガブリエル「フオール以外の誰が自分を殺せるというのか。そして彼女はグラトニー「ゴブレットという一人の魔術師を思い浮かべて舌打ちした。あれはイレギユラー過ぎる。魔術をエネルギーに変換して吸収するなど本来あり得ない魔術だ。理屈でありえないことを可能にする魔術師はたまにいます。『物体の存在を強化、延長する』幾月もその一人だがあれは

ありえなさ過ぎる。

あれではまるで……

「！」

狙撃手を追い詰めたらしい。左手は川、右手は廃ビルの壁が続いていて長い一本道になっている。幾月の身体能力と長い刃から逃げられないと悟ったのか、対峙する。

幾月も止まって右手を柄に触れさせた。

「なぜ私を狙った？ 死ぬかいま答えるか四肢を落とされて拷問されながら答えるかで選べ」

男は無言のまま右手を上げる。脇にあった川から瀑布が持ち上がる。と、ほぼ同時に落ちた。幾月が彼の首を落としたからだ。式を構築し物体を操作し力が循環しきってから攻撃する砲戦型の魔術は幾月にとって遅すぎた。

それに元々そんなに高位の魔術師ではなかったんだろう。後ろから数えた方が早い三桁台と言った所だ。『魔術師の最終』にぶつけるような手札ではない。

——単独では。

水音に隠れて幾月は廃ビルから誰かが落下してくる風切り音を聞き逃す。

横向きの衝撃を受けて幾月は吹っ飛んだ。衝撃を放った男が着地。右手に握る銃から硝煙が上がる随分古い型のリボルバーだ。薬莢が転がる。

そういえば幾月の目の前にいた男は水使いだった。温度を奪って氷を作る魔術師はいるがその手の魔術師は大抵「飛ばす」ことができない。つまり狙撃手は彼ではなかったらしい。

幾月はそう深くない水面から体を起こす。

「オオ？ この至近距離から撃つても効果なしかよ。ちょっとプライドが傷ついたな」

「……『死線の弾丸』、お前が本命か」

幾月が刀を引き抜こうとした瞬間に、空気が破裂する音。右手が弾かれる。『暗くて深い黒』の装甲の上には銃弾が突き刺さっていた。

「動くなよ？」

暗殺組織『ヴァジユラ』所属の二桁台『死線の弾丸』の魔術は視線上の任意のポイントに弾丸を撃ち込む超高速精密射撃だ。ガブリエル・フォールさえいなければ魔術師『最速』の名は彼のモノだっただろう。

『魔術師の最終』に次ぐ力を持つ強力な魔術師だ。

だがこの程度の破壊力で『暗くて深い黒』を撃ち破ることは不可能だ。

幾月は刀から手を離してただ進む。“死線”が弾丸を放つ。弾丸は幾月に命中し、エネルギーを放出しきって停止した。幾月の体勢が少し揺らぐが変化はそれだけだった。

「き、効いてねえ……？」

「『暗くて深い黒』の存在を“延長”しただけのことだ」

『暗くて深い黒』はほぼオートで発動するが意識的に延長を重ねればその防御力な桁が違う。第三位である『奇怪な宴』が貫徹なかった程に。

幾月は刀を抜かない。というか抜けない。余りにも精密な早打ちを前にその隙間すらない。

だから幾月は装甲任せに素手の肉弾戦を挑んだ。

「じゃ、これならどうよ？」

“死線”の右目が鈍色に、僅かに光る。次の瞬間に。

大砲の大口が幾月に向いていた。

「?!」

咄嗟に真横に跳んで逃れようとするが、反射神経程度では全魔術

師の中でも最速に限りなく近い『死線の弾丸』に追いつかない。

「どっかーん」

冗談じみた声で砲弾が発射、ゼロ距離で幾月に直撃する。刀を抜いていないことがわりと致命だった。どんなに強化しようが幾月の体は基本的に軽く、砲弾の質量に耐えきれずに吹き飛んでいく。川を挟んだ対岸に直撃する。右手のリボルバーは匣に過ぎなかったのだ。

「……死ん、でねーな。」

死線が呟く。この程度で死ぬようなやつが『魔術師の最終』の十三位、『桁外れ』などと呼ばれている訳がない。そもそも手傷すら与えていない可能性が高い。恐らく『死線』の放った魔術はダイヤモンドを指で弾いた程度の結果しか残していない。

「必要な交戦記録はもう集めたし、いまのうちにトンスラしますか」
身体強化の魔術を発動、筋肉中のATPが増加され跳躍。『ヴァ
ジューラ』の暗殺者は夜の闇に消えた。

第8話：雷と等速で訪れる死

「やーん。傷がいつぱい！ どれから治そうかしらあ」

『フアランクス』所属の治療士イルアは体育館に麻酔ガスを充満させた。ほぼ全員が眠りについたのを確認して細胞分裂を活性化させる魔力のフィールドを展開して広範囲の患者を一気に治していく。

鼻歌を歌いながら人の合間を歩き、同時に記憶消去を行う。といっても彼女の記憶操作は脳細胞に負担を掛けるような重度の物ではなく、ここで起こったことをずっと昔あったことのように思わせるだけだ。幼児の頃の記憶を思いだせる人間はいないようにそれはずっと深くに埋められる。魔力に抵抗のない人間にはそれで十分な処置だ。

「にしても多いし疲れるなあー。こりゃジャックに特別料金請求しなきゃいけないかもー」

数分で体育館に集合していた全校生徒を治療したイルアは傷の気配がする中庭に足を向ける。

「サエガキソウスケ、お前は僕をおちよくっているのか？」

見事に手足を貫通しているジャックの傷にとりあえず保健室から消毒液と包帯を持ってきた壮介は、罵られた。

「お前さ？ せつかく人が心配してやってるのにどうしてそう素直になれないわけ」

「ボクは魔術師の百二十一位だぞ。お前に心配される筋合いは、」

「はいはい」
消毒液を傷口にぶっかける。

「ひつつつ……、」

ジャックの口から押し殺した悲鳴が漏れた。

「ん……？」

それぐらい平気だろうと思っていた壮介は首を傾げた。

「あ、あなたって」

ゴブレットが体育館のある方を見ると白いドレスの女が腹を抱えて踞っていた。震えている。というか笑いを堪えている。

「ギャハハッ！ いい様だね、ジャック。そういえばあなたって身体操作系の術式をほとんど持ってないんだっけ」

「き、きさま、来てたなら早く治せ！」

涙目でジャックが叫ぶ。「あーはいはい」とイルアが治療のフィールドを展開し細胞分裂が異常活性。穴の空いた四肢が瞬く間に肉と新しい皮膚に覆われていく。

と、隣で神乗が倒れた。

「！？」

驚いて振り向く壮介に「あーダイジョブダイジョブ」とイルア。

「ちよつと記憶操作のために意識を弄っただけだから。しかし君は魔力耐性高いのね？」

それは単にゴブレットの側にいたからだろう。あと『記憶操作のためにちよつと意識を弄った』ことのどこが大丈夫なのかも壮介にはわからなかった。

「しかしジャック・クリーパー？ どんなに君が攻撃魔術の天才で鬼才だからって麻酔くらい自分でできるようになりなよ。戦場で常に治療士なんて役に立たない職種がいるとは限らないんだから」

「余計なお世話だ」

痛みが収まったのか普段の生意気さが戻ってきたジャックが不機嫌な表情になる。

「それよりいまは尋問だろう。さっさとそのテレキネシスを起こせ！」

イルアはプラプラと片手を横に振った。

「やだなあ、無理に決まってるじゃん」

「？」

「わたしに治せるのは細胞分裂の停止してない生物だけだよ。死人なんか治せるはずないじゃん」

……は？

「なんとかここまでは気づかれずにこれたらしいですね」

「さて、ここからはどうすんだい？」

「順当に行きましょうか。ガブリエルが単身で特攻、自分がそれをサポートしながらフェイトを守る」

「まあ俺の力だとお前らの高速戦にはついていけねーからなあ」

「自分とガブリエルがいるんですから滅多なことは起こらないでしょうが、一応用心しておいてください」

「はいはい、そんじゃ」

「ああ、始めよう」

ガブリエルの体が一瞬紫電色の光を放つ。そして消える。轟音。空中に閃光が尾を引く。回避も防御も不可能な秒速三十万キロメートルの稲妻となって、防御結界にぶち当たり拮抗。攻撃を受けていることを察知した内部からの魔術師達の応戦がガブリエルに殺到する。対応が早いのは襲撃を予測していたからだろう。

「……結界だけは大したレベルだ。かわすことは雑作もないがそれでは突破には更に時間がかかってしまうな。ここはあえて」

「ええ、自分に任せてください」

岩石、樹木、周囲のありとあらゆる物がテレキネシスによって持ち上がる。

それらが飛翔し攻撃系の魔術に命中、相殺、三桁から四桁程度の魔術師では大質量のそれらを貫通することが出来ない。

射線が変更。ガブリエルに集中していた魔術が大範囲に撒き散らすように、フェイトの方にも向く。『奇怪な宴』が地面に片手をついた。十メートル四方程度の大きさに地盤が捲れ上がって防壁を築く。圧倒的な土の壁に僅かに傷を残して消失。

「相変わらず化け物してんな、あんたら……」

「複雑なテレキネシスならともかく防壁程度の単純動作ならまだまだ軽いですよ。」

その気になれば地中のプレートに働き掛けて各地の大都市を崩壊させる程度の地震を起こすくらいなら、自分の力の範疇です」

ふざけている。

とか言っている間にガブリエルが並の魔術師では百人掛かりでも突破できない防御結界を突破する。ガブリエルの力ならば大威力の魔術を使えば一撃で崩壊させることができるだろうが、建物自体が重要な調査対象であるからしてそれはできない。地道な各個撃破の作業になる、とフェイトは思っていた。細い稲光が一閃。窓枠を溶かして建物に侵入し一秒も掛からずに玄関から出てきて人の形に集束する。ガブリエル「フォールがそこに立っていた。」

「……終わったぞ」
秒殺。

味方ながら恐ろしすぎる。事前の調査では三桁から四桁ばかりでさほど強力な魔術師はいないらしいと聞いていたが、この女は本気で化け物だ。

だいたい肉体を電気化するとはどういうことだ？ 質量をゼロ近くにして空気抵抗をほとんど無視する？ 電速の移動？ そもそも結界をぶち破ったあの魔力の量は？ 根本的な部分でガブリエル「フォールは何かが違う。」

（まあだから意味があるんだけどな）

「……あとは何人かを『唯一の選択』で尋問するだけです。こちらにガブリエル「フォールがいるとはいえ随分とあっさり済みましたね。第四位を殺したというので自分としてはもう少し苦戦を予想していたのですが」

「うん、まああれデマだからな」

「は？ どういうことですか？」

首をフェイトの方に向けようとした『奇怪な宴』の視界の端で何

かが紫電色に光った。

「ガブリエル」フォール……？」

人間が炭化するレベルの稲光が彼を呑み込んだ。

「つてか標的がそもそも『ミスリル』じゃなくてあんただしね」

しかし『奇怪な宴』の対応は早かった。いかに光速の魔術といえど発動前に軌道を予測、進行を妨害できれば防ぐことはできなくはない。通電性の低いコンクリートを盾にして防ぐ。ベクトルを塞がれた雷撃が膨大な余波を吐き出しながら四散する。

「やるじゃんガイスト。じゃあインファイトならどうよ」

ガブリエルの体が紫電色に発光して、消える。が鉄骨にぶち当たって止まった。

「残念ながら……」

テレキネシスによって建物から導線が剥き出しにされ鉄骨に巻き付き、磁界が発生、電気そのものであるガブリエルをねじ曲げる。

「奇襲が失敗した時点でああなたの洗脳下にあるガブリエルでは自分には勝りませんよ」

「へえ、やるなあ」

「どういうことが説明……、いや、そもそもどうやってガブリエルを？」

「あんたつて頭悪い？」

「……」

「五年かけたただだよ。時間さえ掛けたら俺はどんな人間だろうが支配下における」

「ガブリエルがそれに抵抗せずに……？」

「ところであんたさ、あんなちゃっつい磁界程度でマジであの化け物を縛っておけると思ってる？ おめでたいねえ」

ベキイッ！

「?!」

「俺のレベルからしたら幾月辺りで充分おっかなかったが、あいつホントに本気で化け物なのな」

「ミハイルが消えた？」

幾月は形式上驚いた顔をした。幾月にとっては上層の連中がどうなるうがわりと知ったことではない。幾月が思ったのはいま目の前にいる興奮して唾を飛ばす上層の側近の首をはねたいということだ。だいたい幾月に文句を言うのは筋違いだ。幾月はここに留まれと命令を受けただけで別にミハイル個人の護衛を引き受けたわけではない。

自分達の無能を棚に上げられてもな、と幾月は半ば呆れる。

(……待てよ?)

仮にも上層の側近についている連中が無能なんてことがあり得るだろうか。クセの強い二桁台の連中や『魔術師の最終』こそ動かせなくともおそらく戦闘型の三桁台の前半、ジャッククリーパーと同レベルくらいの魔術師は揃えているはずだ。だとすれば複数人で掛ければ『魔術師の最終』クラスでも対等以上に渡り合うだろう。

その中でミハイルが姿を消した？ そんなことがありえるのか？

(……おもしろいな)

幾月の推測だが他の『魔術師の最終』も『ヴァジュラ』の連中に襲撃を受けていただろう。余計な動きをさせないためだ。『ヴァジュラ』は事情を問わず金で動く。二桁台の戦闘型魔術師十三名の内半数が『ヴァジュラ』の所属。『魔術師の最終』を相手に生存できるのは『ヴァジュラ』くらいのもものだ。

「おい、聴いているのか！」

幾月は刀を抜いて男の首に突きつけた。抜刀は神速。一息で抜くことも難しい2メートルの刃はミリメートル単位のコントロールで男の首に触れていない。

「うるさい」

とだけ幾月は言って彼に背を向けて携帯電話を取り出す。溜め息を吐いて彼女が唯一番号を知る『魔術師の最終』、『火の風』を呼び出した。

第9話：ツンデレ

「おいおい、そんなにビビるなよ。交渉の条件、ガブリエル＝フォールを連れてこないことはちゃんと守ってるって。そっちが護衛を三人連れてることに文句は言わないさ。いまあんに喧嘩売っていいことはあんまりないからな、ミハイル」

『魔術師の最終』の一人らしい「唯一の選択」さんは僕に対して嘲るように言う。片手には僕が注文した箱を引きずっている。大きさは人間大くらい僕が箱を注視していることに気づいた「唯一の選択」さんはやや怪訝そうに表情を作る。

「しかしこんなもの何に使うんだ？ いや詮索してる訳じゃないがな。純粋な興味だよ。俺ならそんなもん絶対に手元に置いときたいがないがな。研究用にしてももつと扱い易いやつを探すね」

僕にとってこれ以上に有効な対象は少ない。「雷と等速で訪れる死」か「恐れ知らずなゼクト」、もしくは「頂きに立つ者」か「呪われた光」くらいだろう。

「まあこれであんたとも晴れておさらばってことで」

これからどうするのか？ と僕は訊ねた。深い理由はない。ただ『唯一の選択』の異名を持つ魔術師が選択したことだ。なにか深い理由があるのかもしれない。

「これからか。考えてねーな。というかぶっちゃけもう目的は果たしてるんだよな。最終のクセに無能無能言われるのがムカついたからガブリエル＝フォールを手中に入れて上位の誰かをぶっ殺してやりたかっただけだからよ」

僕は笑った。『傲慢』『憤怒』『怠惰』『嫉妬』『強欲』『色欲』『暴食』、人が身を滅ぼす理由は昔から大抵がこの七つだ。しかしそれを僕が言うのもまたおかしい話なのだろう。

「ところでさ、そいつらを上層に従うように調整したのが俺だってわかってて連れてきたのか？」

俺を利用できると思ったのか？ 甘いんだよ、ミハイル」エクスカリバー。俺は利も不利も自分ですらどうでもいい快樂主義の破滅主義者だぜ？ 戦争、多いにむしろそうじゃないか」

もちろん、理解して連れてきた。なぜなら彼の留守は僕に取って非常に都合のいいものだからだ。むしろこうなることを僕は望んでいた。隣に立つ護衛が刃を抜く。

「もっと愉快に殺しあえよ、魔術師共」

『ミスリル』のアジトだった建物が血に濡れる。

僕の首が落ちたが僕にはそんなことはどうでもよかった。三人の護衛は床に膝をつく。洗脳が切れて意識が遠退いたのだろう。

「唯一の選択」さんはここを出ていく。箱を置いていく。よかった。箱を持っていかれたらどうしようかと僕はそればかりを心配していた。

「聖書側四桁台レンデル」フィーリア、三桁台クロノ「サンダー」ロッド殺害の容疑でグラトニー「ゴブレット」の召喚を要請。これを拒否した場合、第二級拘束までの使用を許可する。か。なかなかおもしろいことになったじゃないか」

ジャックが携帯に表示された画面を見せてくる。口元は皮肉げだが目の端は僅かながら不快感に歪んでいる。

「これって……」

わざわざ説明しなかったがゴブレットの問いに答える者が他にいなかったたので、ジャックは答えざるをえなかった。

「言うまでもなく上層を通した正式な『底無しの聖杯』への拘束命令だ。ちなみに第二級拘束つてのは四肢を切断して死なない程度に治療した状態だな。一級は死んでてもありだ。よかったな、少しましだぞ」

「っ……」

壮介が齒を噛む。イリアが口を挟んだ。

「でも君たちは殺してない。レンデル」フィーリアの死因は精緻な雷撃術式で心筋を停止させられたこと。クロノ」サンダーロッドは食道辺りに刃を突っ込まれてショック死。どちらも君たちの仕業じゃない」

ジャックは死体を見た。

「へえ、そこまでわかるのか？ 見たところ外傷はほぼないが」

「あたしだって聖書側最強の戦闘集団であるフランクスの一員なんだよ、なめないで欲しいね。」

ジャックに手傷を負わせて逃げたのが禁書側死手の篠突きだって話も総合すると、ハメられたね。君たちを襲ったこいつらは元から死体だった。死体行使術なんて聖書側で認可されるはずのない術を使える魔術師がもしいるとすれば……、『唯一の選択』フェイト」クラルク。こいつしかいないね。こいつが禁書側と繋がっているとしたらだいたい辻褄は合うよ多分この死体行使術を使うには『底無しの聖杯』が邪魔なんだろうね」

「なあ、その禁書側の術者が死体行使術を使ってる可能性は？」

「ありえないな。禁書側の魔法技術は長い間こちら側を後追いしている。僕たちが使えない魔術をあいつらが使えるはずがない。伝説の『一頂きに立つ者 トーレスト』じゃあるまいし」

「トーレ……？」

「ジャックが絡んでることだし運がよかったらフランク스가動いてくれるかもね。あたしはこの死体貰って帰るよ。」

それじゃ、頑張ってね。あ、ジャック。人数多かったから特別料金よろしく」

イリアはにこやかに言う。ジャックはあからさまに視線を反らした。

「わかってると思うが、ボクもこの件からは降りさせて貰う。構わないな？」

「お前っ……！」

掴みかかりそうになった壮介をゴブレットが止めた。

「うん。仕方ないよね。上層の命令に逆らってまで君が動くメリットはないわけだし」

「ああ。ただ『唯一の選択』の椅子が開けばボクは一つ上に上げられる可能性もある。お前らの護衛は降りるが、裏で動いてみよう。幾月にも連絡を取ってみる。あの戦闘狂ならメリット・デメリットを抜きに動くかもしれない。ボクとしては幾月と『選択』が共倒れになるのが理想だがな」

「……」

「なんだサエガキソウスケ、こちらをじろじろ見て」

「いや、お前ってツンデレなんだなと思って」

「ふざけてないでさっさと無様に逃げ回れ、このド阿呆」

「ああ、やはりか。報酬？ ……わかってるよ。ギョツとしてやればいいんだろ。相変わらずお前の性癖は理解に苦しむな。ちつ。いや、いまのは舌打ちじゃないぞ、多分。そういうわけだ。頼む。私？ 『死線』^{デットライン}のクソに借りを返す必要があつて…… すまん。キャツチだ。切るぞ。は？ ……もういい。黙れ」

幾月は一方的に通話を切った。

「ベルか。済まない。呼び方？ ジャック・クリーパー、これでいいか？ 何のようだ？ ……『底無しの聖杯』に拘束命令？ 『唯一の選択』の離反？ 聞いていないな。おもしろいじゃないか。は？ なぜ私がいっつらを助ける必要がある？ 交換条件？ たかが三桁台がこの私を動かせるのも思っているのか。

……待て。なぜお前がそんなことを知っている？ ちつ。嘘なら私はお前を殺すぞ？ いいだろう。協力してやる」

退屈な護衛の任務なんてクソくらえだ。幾月は思うが自分から買

つてでた分だけ放棄はしにくい。ゼクトじゃあるまいし、代理を立てるくらいの常識を幾月は心得ている。

「……またあいつにかけるのか？」

幾月は携帯電話を見つめて、舌打ちを一つしてアドレス張を開いた。

「済まないが頼みごとが一つ増えた。ああ、さわるだけだぞ……それ以上やれば殺す」

電話越しに陽気な声で「むっふっふ。やってみればいいのかなー。第六位『火の風』はそんなに簡単に負けないと思うのかな」とかなんとか聞こえてきて幾月は携帯電話を握り潰しそうになる。

第10話：連鎖

ジャック「クリーパーはホロウバステイオンに通じる門をくぐった。

「……久しぶりだな」

ジャックの所属する『フランクス』という組織は三人の『魔術師の最終』と二十三人の二桁台、六十六人の三桁台の戦闘型魔術師を有する聖書側最強の戦闘集団だ。上層から直接の難易度の高い任務や戦地に赴かされることが多い。ジャックは優先してそんな危険な任務を請け負ってきた。

「そのボクがどうしてあんなアホどもに感情移入なんかしてるんだか」

もつと悲惨でもつと凄惨な光景も見てきた、と思う。魔術を悪用するグループの男を殺して、泣いている女を焼いたこともある。命乞いをする禁書側の魔術師の首を吹き飛ばしたり、毒で助からない仲間を焼いたこともあったか。

一通り悲しんで慣れた、はずだった。

ジャックは十四歳だ。自分の感情の揺れがその幼さくるものだと思っっている。

「……まあ理由なんてのはどうでもいいか。ボクはボクでやりたいようにやるだけだ」

一人ごちてジャックは歩き出す。まずは報告。四桁の認可こそ受けているが『底無しの聖杯』は『消失』が独自に育てていた魔術師だ。上層の連中と『魔術師の最終』は仲が悪いことが多く上層が持っている『底無しの聖杯』に関する情報は少ないだろう。

ある程度改竄すればあいつらに振りかかる危機は減るはずだ。とジャックは考える。

例えばあの魔力無効化はグラトニー「ゴブレットが意識しなくて

もほぼ常時発動する。と報告すれば少なくとも『死線の弾丸』などの「相手に気づかれずに殺せる」魔術師を回されることはないはずだ。魔術を使わなくともある程度戦える魔術師——例えば幾月のような——を使うだろう。

ジャックがそうした情報を整理しながら『城』に入り「お？」『死線の弾丸』と出くわした。気づいたのはあちらのほうが早かった。お互いに構えない。『フランクス』も『ヴァジュラ』もやっていることは似たような物だ。片方は殺す、片方は守る、という別のベクトルではあるが。

「なんかやつれてるな？」

『死線』は軽い口調で言った。

「使いすぎなんじゃねーの？ お前ほどの才能があればあと五年もすれば二桁だろ。その前に潰れるなよ」

「余計なお世話だ」

ジャックは隣を抜けようとした。何気なく『死線』が右手を突き付ける。いつのまにかそこには拳銃が握られていた。

「なんのつもりだ？」

「や、ちよつと力の差を思い知らせてやろうと思ってね」

B A N、とふざけた口で言い『死線』は銃をしまう。

「どんなに焦ってもお前に二桁はまだ早い。いまは地道に力を磨くんだな」

それからジャックの隣を悠々と抜けていく。

「……そんなことはわかってるさ」

二桁からは魔物の巣窟だ。『炎を呼ぶ鐘』という魔術師は攻撃力は勝るとも劣らないが防御力が圧倒的に低い。

……いまはそんなことはどうでもいい。

ジャックはアロスを訪ねた。二十三階にある部屋をバカと煙は高いところが好きだなとジャックは思う。魔術師にも時間と空間だけは操れない。高所の部屋なんて不便だけなのに。

二度部屋をノックし、時計を見る。八秒待ってそのあと三度叩く

と鍵の開く音がした。実際こんなことに意味はない。少ない音で鍵を破れる魔術師は多いし、中には鍵を開ける必要すらない魔術師もいる。そもそも『唯一の選択』が悪意や敵意に対して発動する防衛術を組み上げているのだから、暗殺目的の侵入はありえない。こんな面倒なことをしているのはただのアロスの趣味だ。

「三桁台『炎を呼ぶ鐘』のジャック・クリーパーです」

「敬語はいいよ。固くて疲れる」

嫌味が笑みを浮かべる中年の男がそう言ったのでジャックは口調を砕いた。

「『唯一の選択』は戻ってるのか？」

「まだだが、そういえばあの三人、いや、『雷と等速で訪れる死』

と『奇怪な宴』に向かわせたにしては少々遅いな」

「『選択』^{セレクト}に裏切りの可能性があるって噂を聞いたんだが」

「本当か？ ……わかった。他の上層に話を回そう」

「それと、新しくグラトニーの捕縛命令を出したのはあんたか？」

アロス

「そうだが、そういえば間近にいたはずのお前がなぜここに？」

「頼まれごとが終わって帰ろうとしたところでわかったんだ。誰か代わりの魔術師は出たのか？」

「いいや、今日中にでもお前が連れてくるものだと思っていたからな。直ぐに代わりを出そう」

「『底無しの聖杯』のマジック・キャンセルはほぼ全方位の常時発動だぞ？ 普通の魔術師じゃ話にならない。小隊を出すのか？」

数で詰められてはあの二人にはどうしようもない。幾月が間に合わなければ捕まるだろうな、とジャックは多少諦めた。

「いや、バーサーカーを出す」

「っ……」

幾月が間に合わなかったら？ バーサーカーが相手なら例え幾月が間に合っても…… 幾月とあれは相性が悪すぎる。せめてゴブレットの隣にいるのが自分なら。

「どうした？ 顔が青いが」

「なんでもない。少し疲れてるんだ。失礼する」

ジャックは部屋を出た。階段のほうに向けて歩いていると後ろで三回の軽いノックが聞こえる。逆側の階段から登ってきた誰かがアロスの部屋を訪ねたらしい。ジャックは振り返ったがもう中に入っていたようだった。

（なるほど、ノックと待ち時間は人物の特定か。一人一人に違う暗号を教えてるんだな）

改めて階段に向き直ってジャックは歩き出した。

ジャックが部屋を出て直ぐにアロスは他の上層に『唯一の選択』の話を回し、バーサーカーと呼ばれる魔術師に指示を出した。あれを魔術師と呼んでいいのかはいま一つアロスにはわからないが、最新というモノに興味がある。戦闘データを取るには対魔法能力を持つ『底無しの聖杯』はなかなか優秀なモルモットだ。

（それに、あいつがやけに『底無しの聖杯』には執心しているからな。バーサーカーは勢い余って殺すだろうがどうせ捕獲しても同じことだ。さつさと始末して恩を売っておくのも悪くない。しかし『唯一の選択』のことを嗅ぎ付けたか。どこから漏れたかしらんが『炎を呼ぶ鐘』には少々注意を払うべきかもしれない）

扉が三度ノックされた。あいつの使者の証だ。鍵を開けて招き入れる。

「今日は、なんのようです？」

あいつめ、こんな手札まで手に入れていたのか。内心で舌打ちする。扉を開いたのは二桁台『ヴァジュラ』の暗殺者だった。

しかし『フランクス』を手札に納めている自分には敵うまい。アロスは勝ち誇る。完全に自由にはないがアロスは『屍踏みの方陣』、『奇怪な宴』、『暗くて深い黒』の三人の『魔術師の最終』を動かせるのだ。

ずばあん

「……え？」

「調子に乗りすぎなんだよ、君」

声に似合わない幼い口調で暗殺者の口が小さく動いた。

アロスは最後に胴から離れた首から自分の体が倒れるのを見た。

『唯一の選択』の離反の情報が周り、その詳細はともかくガブリエルⅡフォールを含む三名全員と連絡が取れない以上なんらかのトラブルがあつたことは確定として、上層はミスリルの組織跡の調査をゼクトに命じた。

「最初から俺様を頼らねーからこうなるんだよ」

ゼクトはあっさり手のひらを返して自分を頼ってきた上層がムカ

ついたのでとりあえずその使者を殺して溜飲を治めた。

「さあて、殺るか」

第11話：彼と彼女と狂戦士

「さて、どこへ逃げようか。なるべく遠くがいいね」

荷物を纏めながらゴブレットが何気なく言ったのが壮介には嬉しかった。一人で行く、なんて悲しいことは言って欲しくなかった。

「魔術師ってどんな方法で魔術師を探すんだ？」

「いろいろだよ。『恐れ知らずなゼクト』って言われてる魔術師は何十キロも離れた場所にいる相手の位置を正確に探知できるんだって。でもそういう魔術的な探し方は警戒しなくていいと思う」

「え、なんでだ？」

「私に届く前に『底無しの聖杯』が打ち消しちゃうから」
「なるほど」

燃烧や凝固はエネルギー吸収で直接無効化できるし魔力というエネルギーで作られたほぼ全ての魔法に対して機能する。

「……ゴブレットがああ『奇怪な宴』ってやつみたいに声を出さずに魔法を使えたら無敵なのにな」

「ああ、それ、どうしてもできないんだって」

「……、？」

「個人が使える魔法には限界があるの。私のスロットはほとんどが『底無しの聖杯』に割かれちゃって普通の魔法に割くスロットが全然残ってないの。だから声で補助しないとレベルの低い魔法も発動しないんだ」

「へえ」

ジャックが炎以外の魔法が苦手なのも同じ原因だろうか？

自分は魔術が使えない、と壮介は強く思う。目立った武器もない。普通の人よりは多少運動神経がいいが幾月のような格闘戦に心得のある魔術師とは勝負にならないだろう。

（俺はゴブレットを守るんだろうか。むしろ足手まといなんじゃ……？）

ふと頭を過つたがそれを振り捨てる。独りより二人のほうがいいに決まってる。

ジャックから受け取った金をバッグに放り込む。

「行こうか」

家から一歩外へ出ると空気がピリピリと肌を焦がした。別に何かがあるわけではない。幾月が叩き壊したブロック塀だとかはいつのまにか完全に修繕されている。ただ自分がいつ命を奪われるかわからない感覚がそういう風に感じさせるだけだ。

（俺はいつまで「これ」に耐えられる……？）

「ねえ、壮介」

ゴブレットに袖を引かれるまで自分が名前を呼ばれていることに気づかなかった。

「え、なんだ？」

「忘れ物した。取ってきてくれる？」

頷いて玄関に戻って、何を忘れたのか聞き忘れたことに気づき振り返る。

そこにゴブレットは居なかった。

ああ、行ったのか。

戸惑うより先に察した自分に嫌悪を覚える。ゴブレットは壮介より早く壮介の機微に気づいていた。だから……

「さいつつていだな」

きっと探しても見つからない。ゴブレットが魔術師で壮介がそうでないからだ。魔術師が選ぶ手口もその力も把握していない。そんな自分がついて行くのはそもそも無理があつたのだ。

初対面ではかわいいなと思った。

少しして同情した。

一緒に過ごして夢を見た。

言ってみればただそれだけの仲だ。

部屋に戻る。落ち込もうとして自室の扉を開いて壮介は、

『暗くて深い黒』の胸部に鼻先を埋めた。

「……少年はなかなか積極的な」

微塵の動揺もなく幾月は言う。壮介は飛び退く。刀に手を掛けているのが冗談か本気が計りかねた。

「一人か？ グラトニー」ゴブレットはどうした？ ……ああ、安心しろ。私はあいつの味方だぞ」

「どっか行つた」

「置いて行かれたのか。まあ妥当な判断だな」
妥当。反芻してそうだよなと言い聞かせる。

「それで、少年はどうしたいんだ？」

「どうしたいのか？ 決まってる。いまはまだ……」

「できる限り一緒にいたい」

そうだ。それでいいじゃないか。辛くなったらそれから離れたら。それはもしかしたらひどくゴブレットを傷つけるかもしれないけど。幾月は皮肉気に笑みを浮かべて壮介の襟首を掴んだ。

「えっ、あの……？」

「掴まってる」

窓に寄る。開いて窓枠に足を駆け、翔んだ。二十メートル強の跳躍。眼下に街が下ろせる。人がゴミのようだ、とか言えそうな光景が広がる。恐怖を無理矢理飲み込む。

「幾月」

「なんだ？」

「ゴブレットになんていえばいいのかわからない」

数瞬置いて幾月は「そうだな、経験上から一つ助言させて貰うとすれば」と（おそらく）薄く笑んだ。

「優しいだけの男なんて退屈だぞ」

「……？」

「見つけた、が厄介なおまけつきらしいな」

屋根の上に着地。噛んだ歯が欠ける感触がした。今度は斜め下に向けて蹴る。自動車の最高時速並みのスピードで道路を駆け抜けてゴブレットの後ろ姿を簡単に捕捉した。ゴブレットの姿はぼやけて見えた。何かの光学系の魔法で自分を視覚的に隠しているんだろうが上方までカバーできていないらしい。

（すっげえ……）

幾月の使った魔術を推測してみる。先ず脚力の強化。跳躍時に使ったモノだ。多分視力も強化している。壮介には人が豆粒のようにしか見えなかった。着地時には関節を硬化して衝撃を殺したんだろう。疾走する時は肉体を弱体化して体重を減少。人体構造的に重心をずらして走ることに最適な肉体を作り上げる。

身体能力変化を極めた魔術師。

バカみたいに凄まじい。

（あいつはこんなやつらから逃げようとしてたのか……）

「少年、合図したら手を離せ」

しがみつくの必死だった壮介は初めて顔を上げた。

ゴブレットの背に追い付くか否かの瞬間に幾月は更に加速して、

「離せっ！」

ゴブレットに向かってほとんど垂直に降ってきた巨刃を受け止めた。弾き飛ばされるようにして転がった壮介がその剣と持ち主を視界に納める。

信じがたいサイズだった。『延長』を行使した幾月の刃よりも長いかもしれない。またその太さは電信柱二つ分くらいはゆうにある。それを操っているのが壮介よりも一回り小さい少年——魔術師の攻撃力に背丈はあまり関係ないことをジャックを見て知ってはいるが——であることに驚嘆する。

「離、れろっ」

「え？」

「私から離れろっ！」

そして幾月がその巨大な質量に押し潰された。

「うそっ……？」

呆けるゴブレットを強引に抱えて壮介は走る。多分幾月は生きてる。化け物同士の殺しあいには巻き込まれて堪るか！ 血の混じった唾を吐いて壮介は十字路の影に隠れた。それ以上は動けなかったからだ。

幾月を押し潰した大剣士、バーサーカーはさっきまでそこにいた獲物がどこへ行ったのかを探した。

さっきまでそこにいた気がするんだけど……？

首を回して不在を確認し、また探せばいいやと思考に似たものを放棄する。

「……少し効いたぞ」

大剣が下からの力で持ち上がる。下敷きになっていた幾月が立ち上がった。頭部からは血が垂れている。瞬間的に発動した延長済みの『暗くて深い黒』の防御力を完全に上回る攻撃だった。

「力でこの私が負ける。……ありえない。なんてことはありえないか」

身体能力特化型の『最終』である幾月が知る限り純物理攻撃で『暗くて深い黒』を貫ける魔術師は『恐れを知らないゼクト』だけだ。あの『奇怪な宴』ですら不可能だったことが並の魔術師にできるはずがない。

バーサーカーが二撃目を振りかぶる。そしてまた降り下ろす。

「……なら、こうか」

脚力に魔力を集中、真横に地面を蹴る。幾月の延長線上にあった民家が叩き潰される。普段なら中に人がいないことを祈る程度のこととする幾月だが、既に闘争心に火がついている。

叩きつけられた反動を使って跳ね上げた大剣の軌道が変化、無骨

な鉄の塊が横薙ぎに振るわれて幾月を追尾する。が、彼女はもうそこには居なかった。

大剣の軌道よりも数メートル高い位置に舞った幾月が空中で縦に一回転する。体勢を立て直して斬撃に移る暇がなかったのだが彼女にとつてそんな些事は関係ない。回転した勢いのまま延長された刀がバーサーカーを捉えた。踏み込みのない空中での斬撃でも強化された腕と腰の力を加えられた刀は充分に一撃必殺の威力を誇っている。

それが、バーサーカーの表皮で止まった。幾月は強化、延長された不在の刃が碎けるのを感じた。

（硬い?!）

手に痺れが走る。その一瞬をバーサーカーは見逃すが、大剣を放り捨てて空中の幾月に突進する。重い大剣では幾月を捉えるのは不可能だと思つたのかもしれないし、ただ持ち上げるのが面倒だったのかもしれない。

フルアームズ
「完全装甲!」

幾月の全身を黒が包む。刀を握る腕と逆をつきだして命中の瞬間に打ち出された拳を掴む。そんな小細工はまったくの無意味だった。幾月はアスファルトに叩きつけられた。アスファルトのほうが碎けてへこんで月面のクレーターに似たものが生成される。幾月は一般的な道路というやつがアスファルトで出来ていることに感謝すべきだっただろう。真下にあつたのがもっと硬い物質か、あるいはもっと柔い物質なら次の一撃を避けることはできなかったはずだ。落下と同時にバーサーカーは足を突き出した。蟻地獄のようなクレターをなんとか蹴って幾月は離脱する。

そして5、6メートルくらいの近い距離で両手をだらんと下げてどこを見ているのかわからない目をしているバーサーカーを見て、ようやく幾月は自分が何を相手にしているのか気づいた。

「鋼の皮膚、人工筋肉、魔術装甲と雷撃系魔術での発電に蓄電池の内臓してそれらをフル稼働……なるほど狂戦士とはよく言ったも

のだ。もつとも狂ってるのは作ったほうの頭だが」

幾月も人のことを言える体ではない。間接の補強に鉄材を埋め込むぐらいは彼女もやっている。長い手足はある程度矯正されてできたものだし、手に馴染んだ刀の感覚は生まれて間もない頃から与えられたものだ。

「……死にたいか？」

だから目の前の狂戦士が自分と少しだけ重なって映った。あの状態の術者に意識がないことなど幾月にはわかっていた。だがバーサーカーは何の誤作動か少しだけ頷いた。幾月の勘違いかもしれない。攻撃に入るためのほんの短い予備動作だったのかもしれない。だが確かに頷いた。それでも幾月から躊躇いが消えたのも事実だった。

二人はほとんど同時に動き出す。バーサーカーが大剣を掴もうとするのを幾月が刀を振るって阻止。バーサーカーはミリ単位で動きを制御して刀をかわす。一瞬あとに爆発的に加速した。目は白濁している。

「キャンセル
装甲解除」

幾月は体を真横ずらした。バーサーカーが誰もいない空間を踏み抜いて視線を動かす。が、バーサーカーの見た方に幾月は居なかった。背後に回った幾月は背中中に刃を突き立てる。切っ先が弾かれる。刀身に強化を施していなかったら折れているだろう。バーサーカーが反転するがその頃には幾月は遙か後方に跳躍していた。

幾月の装甲魔法は体に普通に循環している魔力を利用している。それを全て脚力に回せば幾月は魔術師の誰よりも速くなれる。ただ一人ガブリエルを除けば。

バーサーカーが追おうとする。幾月は居合いの構えを取った。視力を強化、バーサーカーを捉える。

「『暗くて深い黒』」

彼女は呟いた。鞘の中の日本刀が漆黒に覆われる。足から腰へ。腕、刀へと強化を循環させる。そして幾月は刀を抜いた。

バキィッ！ と、大きな音が響く。それは斬れた音ではなく、鋼色の皮膚が割れた音だった。衝撃を受けたバーサーカーがたたらを踏む。その間に幾月はゆっくりと最大限に強化した一撃を振りかぶることができた。刀を両手持ちに代える。

「がああっ！！！」

咆哮と共に振るわれた処刑人の剣を、割れた鋼の皮膚は受けきることができなかった。狂戦士が砕けてただの肉と金属の塊となる。別にいままで手加減していた訳ではない。ただ斬撃が通用しない相手に少しだけアプローチを変えたただけだ。そして手の内を明かすに値する相手だと認識した。

幾月が刀を一振りすると錆に似た黒が剥がれ落ちた。

戦闘の緊張が解けると同時に幾月のはその場に尻餅をついた。

「ダメージを負いすぎたか」

自己治癒能力を強化を施して痛覚神経を弱化する。折れた骨を自分で支える。完全に治すには多少の時間は掛かるがくつつくまでなら数分程度だろう。

「……しかし派手にやってくれたな」

周囲の民家が幾つか倒壊している。弱化だけで覆い隠せるレベルではない。記憶をいじるにも規模が大きすぎて不都合が出るだろう。だいたいあの手の魔術は多用するべきではないものだ。

しかしそんなのはすべて幾月が考えるべきではないことだろう。

（応急措置だけ済んだら、行くか）

地鳴りにも似た戦闘の音がようやく止んだ。壮介はゴブレットが

動けないように抱き止めている。こうでもしないと幾月の加勢に行つてしまいそうだからだ。『最終』と呼ばれる魔術師の戦いに意地や覚悟なんか無意味だとこのあいだ奇怪な宴で痛感したところだ。

「ね、ねえ、逃げないと……」

「『暗くて深い黒』を倒すようなやつから逃げれるのか？」

「私じゃなくて壮介がっ！」

「知るか、お前が巻き込んだんだ。俺の命はお前が責任持て！」

無茶苦茶な理屈だ。

「……」

そもそも理屈じゃない。だからゴブレットは黙らざるを得なかった。

「なんだ。もつと修羅場を予想していたんだが意外に普通じゃないか」

幾月がつまらなさそうに息を吐いてゴブレットは壮介を突き飛ばした。

「あの、助けてくれてありがとうございます」

「気にするな。契約を果たしているだけだ。……それよりそこで口から血を噴いている少年をなんとかしないでいいのか？」

「え？」

ゴブレットとしては軽く突いただけのつもりだったのだが壮介は横向きに倒れて呻いている。

「バーサーカーに弾かれた時にどこか強く打ったらしいな」

「きやああっ！？ 壮介？ 壮介？！」

なんだかんだで仲がいいんじゃないか、多分自分のほうが重傷なんだがな。

がらにもなく幾月はそんなことを考える。

「その治療が終わったら行くぞ」

「行く、ってどこへ？」

「ホロウバステイオン」

第12話：飽きるまで殺戮してやる

ゼクトは明かりのついていない廃工場に足を踏み入れた。暗闇の向こうから飛来した銃弾を鉄で受け止める。ゼクトの周囲には液体の鉄が地面を這うようにして進んでいる。

（流動する鋼鉄を超高速で動かして硬化する、金属属性の最強の魔術師『恐れを知らないゼクト』ね）

「よお、来てやったぜフェイト」クラंक

弾丸の来た方を見る。暗がりの中でも魔力の感覚だけでゼクトは相手の存在を認識できる。フェイト「クラंकとその支配下にある四人の魔術師がゼクトにはつきり見えた。フェイトの方からは窓からわずかに射し込む光がゼクトの白髪を映している。

「会えて嬉しいよ、ゼクト。俺を散々無能扱いしてくれたのはお前だからな、やつぱお前を一番殺したかった」

「そのための下準備に随分と手間をかけたらしいな」

「当然だろ、俺は聖書側第二位のお前を俺は過小評価できない」

「わざわざ殺されるための努力を、感心するよ」

「まあせいぜい肝を冷やせよ」

フェイトが両手を広げるとそこに三人の魔術師が反応した。

「手動操作か」

フェイトが動かした最初の人形が行ったことは斬撃だった。三桁台上位が行う斬撃だ。幾月ほど速くはないし重くもないがそれなりの破壊力を備えていた。ゼクトはとりあえず流動させた鉄を硬化してそれを受け止めた。

「いいぜ、飽きるまで殺戮してやる」

（おいおい……）

ゼクトの視線がそちらに動く。同時に逆側に飛び込ませていたパイロキネシストが触媒に火をつける。ジャックのそれより小さいが速く強力な炎がゼクトを居抜く。ゼクトは微動だにしなかった。た

だ鉄が彼を守った。

（三桁台上位で攻撃力不足か。とんでもない硬度だな）

防御力は幾月以上かもしれない。やはりと言うべきが無策で挑んでいい相手ではない。フェイトは一端二人を引かせようとした。

次の瞬間、

「ッ……！」

フェイトは三人目を盾にした。鉄がゼクトの近くにいた二人とフェイト自身に伸びた。軌道を逸らせたが左肩を大きくえぐられた。フェイト以外は的確に急所を貫かれて死んだ。

だがフェイトも同時にガブリエル「フォール」を動かして秒速三十万キロメートルの雷の槍を振るった。

「拍子抜けさせてくれるなよ。これがあのガブリエル「フォール」だ
と？」

電流がバチバチとはぜながらゼクトだけを避けた。自由電子を持つ鉄は電気を通しやすい。雷の槍を先読みして鉄に当てて受け流したのだ。ゼクトの探知能力は魔術師でも群を抜いている。

（しかしあの量の電撃を鉄に通電させて外に流した、ね……）

フェイトは鉄から強引に肩を引き抜いて数歩退く。遊ばれているのがわかっていて。殺すならいまの瞬間にフェイトは死んでいた。フェイトが殺されない理由は多分……

「出し惜しみするなよ『唯一の選択』、結構期待して来たんだぜ？
お前も俺を殺せないのか」

「俺といい幾月といい『火の風』といい、『最終』は人格破綻者ばかりだがお前はその中でもとびきりだな」

「はあ？ お前らを一緒にするなよ」

ゼクトは不快そうに顔を歪めるが殺されたいがために殺すなんてのは異端者だらけの魔術師の中でも相当壊れている。『恐れを知らないゼクト』。それは本来あの鉄壁の魔術を意味しているんだろ？が、死すら恐れないなら確かにゼクトに怖いものはないだろう。

「まじで品切れか？ 期待外れもいいとこだぜ」

ゼクトの目に失望が浮かぶ。鉄の塊がフェイトの頭上に浮かんだ。フェイトは右手を小さく動かしただけ。ガブリエル「フォール」が反応する。

「安心しろ、俺の能力じゃあ俺のスペックを越えてるガブリエルの最大値は引き出せないが、それでもこいつ一人の操作に集中すればもう少しましになるよ」

「そいつは楽しみだ」

トランス、とフェイトは呟き、フェイトの体は支えを失ったように崩れ落ちる。

「うーあーマイクテスト中」

その隣で紫電色の髪を持つ女が中性的な声を出した。視線は真っ直ぐにゼクトを捉える。余剰魔力がバチバチと紫色の電気に変わって彼女の全身ではぜていっている。

「やっぱ完全にコントロールは効かねーか」

フェイトの口調でガブリエルが言う。ゼクトの表情が狂喜で染まった。

ゴブレットと壮介は崩れた家から人を助けだそうとした。しかし物理的な魔法に長けていないゴブレットには瓦礫を退けることは難しい。痺れを切らした幾月が瓦礫の山を蹴り飛ばす。治癒を施して間に合うレベルの負傷者でゴブレットは安堵の息を吐く。

「気が済んだか？」

救急車や警察が来る前に引き上げて壮介の部屋に戻る。

「で、なんで逃げてるのに本拠地に行くの？」

「簡単なことだ。問題の根元を刈り取ればいい」

「根元って……、」

説明が面倒になったのでゴブレットを遮って幾月が刀を首筋に突きつけた。

「お前こそ自分がどんな位置にいるがよく考えろ。お前はほとんど

偶然とはいえこの私と奇怪な宴を退けてるんだ。

たかが四桁台の捕縛と侮った並みの魔術師が来るはずがない。ファランクスカヴァジュラの上位クラスが回ってくる可能性は十二分ある。逃げられるわけがないだろう」

「っ……」

「アロスかミハイルを押さえる。偶然だが知り合いにミハイルの動きを追ってもらっているからまずはミハイルを捕る。何か異論はあるか」

「えっと、アロスはともかく、ミハイル？」

「お前の調律が唯一可能なフェイトを動かしたのがミハイルなら関わっていないはずがない」

「……、？」

「説明が面倒だ。とにかく行くぞ。私の通行証が閉鎖されては何もかもが手遅れになる」

「俺も行く」

「ダメだよ！」

「わかった。ついてこい」

「幾月！」

「戦力としてはお前もそいつも変わらないさ。むしろ一般人の目があつたほうがあちらの打つ手も限られる」

幾月の顔は押し殺しているが笑みだった。上層の護衛、最低でも複数人の三桁台上位を相手にできることを楽しみに思っているらしい。壮介について来させたのは置いていくための方便を考えるのが面倒だったから。

幾月に取っては戦い以外はどうでもいいんだ。

ゴブレットはそれがわかっていたがどうしようもなかった。幾月が言ったことは圧倒的に正しい。このままだと拘束されて洗脳されて兵器にされる。ゴブレットはそれを避けたいと思っているし、壮介もきつとそうだ。

だけどアロスとミハイルを押さえて命令を撤回させる。そんな手

段が現実的に通用するのだろうか。

「生き残りたいならお前に選択肢はないぞ」

「あーもうやればいいんでしょやれば！ とんでもないこと考えるよね君たちって」

「別に私が考えた訳ではないがな。ゼクトが実際に命令に不服を立てて三人ほど上層の連中を病院送りにしている。それを真似ただけだ」

「聖書側からあらゆる生殺与奪の権利を与えられてる第二位と一緒にしないですよ……」

三人は呆気なくホロウバステイオンに侵入することができた。

「底無しの聖杯を解け、抵抗するな。魔力を沈めろ。むしろ私に協力しようとしろ」

他者に関する魔法介入の条件である同意を得ることをしているのだとわかっていたので言われた通りにする。幾月は自分とゴブレットの存在を弱化した。壮介には変化がよくわからなかった。

「どうなったんだ？」

「少年は彼女がここにいることを知っているから効果が薄いけど、ゴブレットの存在を知らない人間からは彼女が拘束命令を受けている魔術師だと気づかなれなくした。ただの少女が歩いている認識になる。私より強い魔術師には効果が薄いけど、まあ充分だろう」 弱化しているところでもゴブレットは平然と誰かとすれ違っているのが気が気でならない。

「堂々と歩け。こそこそしていると逆に不自然だ。私の魔術は第四位ほどこの方向に長けていない」と幾月は言うがゴブレットは人が来る度に幾月の後ろに隠れそうになる。

多少イラッときて幾月はゴブレットを睨んだ。

「う……」

ゴブレットが怯む。幾月が溜め息を吐く。

「少年、ゴブレットと手を繋げ」

「わかつ…… ええっ!？」

「大袈裟だな？ たかだか手を繋ぐただだぞ。私の胸に顔を埋めた時の剛胆さはどうした、少年」

「あれは事故だろ！」

壮介はゴブレットから軽蔑するようなジト目で見られていることに気づく。

「だから事故だったの！」

「うるさい。もう少し小さい声で話せ」

言い返そうとして思い止まる。

「……悪い。気づかれるとまずいんだよな」

「いや、私の勘に障る」

幾月は涼しげに言う。隣のゴブレットの殺気が痛い。仲直りは当分先かもしれない。

『踊れ愚か者共

殺戮の饗宴に』

壮介は携帯電話に出ようとした幾月の腕を掴んだ。

「なんの真似だ？」

「一回でいい。その着うたちゃんと聞かせてくれ」

幾月は強引に壮介の腕を引き剥がす。

「ストームか。……ああ、わかった。すまないな。わかってるから何度も言うな……」

携帯を切ってから溜め息を吐く。

「いまのは？」

「……ちよつとした知り合いからだ。ミハイルの潜伏場所を調べて貰っていた」

「それで？」

「幾つか候補は上がったが、一番有力なのは【森の中】だそうだし、だいたい察しがついていたのか幾月は進行方向を変えない。」

「【森の中】？ って汚染区画の？」

「ああ、公式では汚染区画ということになっているな。そういう時に上層の連中が使うタブーの場所なのさ。あそこは」

「なんでお前が知ってたんだ？」

「フランクスも評判通りの正義の組織ではないということだ。あいつは汚れた手もそれなりに打つ」

道なりに一時間ほど歩いていくと樹海と言っていいレベルの木々の塊が見えてきた。

「……見つかるのか？ この森、結構な広さだろ」

「おそらく魔術師の中でゴブレットだけがそこを単独で見つけることができるだろう」

幾月はゴブレットを見た。ゴブレットは一度頷いて思いつき息を吸い込む。

広範囲に渡って魔術が無効化される。北のほうでバリンとガラスの割れたような音がした。よほど大規模な術が解けたらしい。しばらく歩いていくと寂れた洋館らしきものが見えた。その壁に背を預けていた人物が幾月達を見て言う。

「グラトニー」ゴブレットだけは通せと言われています」

「奇怪な宴……、お前がミハイルと繋がっていたとはな」

ジャックはたまたまサエガキソウスケが歩いているのを見つけた。壮介を見つけてしまえば薄くだが弱化されているゴブレットと幾月も見える。

（歩いている方角からして……、向かっているのは森の中か？ あんな場所に何の用がある？）

第13話：「あなたが欲しくて堪らない」

「半分当たりで半分外れです。それ以上は残念ながら自分の口からは言えません」

ガイストがゴブレットを見る。

「行かない。……壮介と一緒に行く」

「結局そうなるなら中途半端に喧嘩なんかするなと思ってしまふのは私だけか？」

抜き打ちで幾月はガイストに斬撃を放つ。首を刈り取るようなやや高い位置を狙ったためガイストは伏せるだけでそれをかわした。

「なら、私がいっつを抑えているからお前らは走れ」

「さりげなくお前、こいつと戦いたいだけだよなっ！」

壮介とゴブレットが駆け出す。

「……バレたか」

テレキネシスによつて幾つかの樹や土の塊が持ち上がるが、存在を延長、強化された刀が弾き飛ばす。テレキネシスの弾幕に空いた穴から二人が建物に飛び込む。

「行かせたな？」

「どうせ止められませんから。あなたに不意を討たれて終わるよりはずつといい」

ガイストが両手を広げる。テレキネシスの波動を受けた森がざわめく。

「本気でいきます。悪く思わないでください」

そして彼を中心にした半径五十メートル以内の木々が一斉に引っこ抜かれた。砲戦型魔術師の常識を覆す速度で発動したテレキネシスが幾月に向く。延長された刀の一閃が薙ぎ払うが質量差に押されて途中で停止する。幾月はバックステップしようとして背面からもテレキネシスの弾幕が押し寄せていることに気づく。術者を中心に

した魔術にしてはリーチが長すぎる。逃げ場がない。

「完全装甲！」

だから幾月は真っ向から受け止めた。バキバキバキッ、鋼鉄以上の硬度を誇る『暗くて深い黒』に高速で叩きつけられた樹木が碎け散る。

「……それが人間の強度ですか」

呆れ顔でガイストが呟く。日本刀が一閃。木片が飛び散って幾月の前に道が開く。ガイストは樹木の一つを垂直に叩きつけて延長された刃を折る。幾月は地面を蹴って爆発的に加速……、しようとして反射的に目を閉じた。

ズザアア、ザアアアア……！！

耳をつんざく不快な音。装甲越しに何かが擦れる感触。鋼鉄以上の装甲が削り取られていく。

（風?! バカな。ウインドマスターでもないこいつがこのレベルの風術を操れるはずが……）

風ではなかったが、幾月にはそれが見えていなかった。幾月の視界を埋めたのは砂だ。テレキネシスで操られた超高速で流動する砂がやすりのように装甲を削っている。装甲の次には幾月の血肉を。

「があああつ?!?!?」

咆哮ではなく悲鳴だった。装甲を完全に貫いた砂の嵐は幾月の体を極小の単位で一つずつ削って行く。

ズヴァン！

と、音を立てて漆黒の刀が砂嵐を貫いた。超速度でガイストの眉間に切っ先を伸ばす。

「……」

ガイストはそれを冷たい目で見ていた。延長でできた刀はガイストのほんの数ミリメートル手前で止まった。ピキピキとわずかな音を立てて碎けていく。砂嵐が止む。血まみれの幾月が地に伏していた。

「……おや、まだ息がありますか。自分としたことが加減を間違

ましたかね」

ガイストは手頃の場所にあつた樹木を一つ引き抜いて、幾月の頭蓋骨に向けて降り下ろした。

『火の風』の爆風がそれを吹き飛ばした。

「……何のつもりですか」

「君こそなんなのかな？ 私の幾月に何しようとしたのかな？

バカなのかな？ 死ぬのかな？」

「自分と戦うと？ 正気ですか。自分は確かにゼクト程無敵ではありません。屍踏みの方陣（フアランクス）の方が破壊力は高い、七つの盾（アンラッキーセブン）ならば自分のテレキネシスも凌ぎきることも可能でしょう。しかし相性上あなただけは自分の指一本触れることができないはずですよ」

「だから何なのかな？」

ストームはライターを投げた。テレキネシスを受けてライターが空中で停止する。ライターの投擲は彼女の要だ。それが止められるがゆえに最悪の相性になる。と、突然ストームの背後から打ち出された炎がガイストに向けて直進しそこから爆発を引き起こした。

『火の風』は正確には魔術を使えない。先天性で魔力が拡散する障害を抱えていて任意の点に可燃性の粉塵を生み出すことだけが彼女の能力でそれに粉塵爆発という現象を引き起こす。火そのものをライターを投擲することで補っているのだが……

「なかなかおもしろそうな場面に出くわしたな」

樹木を盾にしたガイストが炎の出所を探す。ストームの数歩後ろに少年がいた。

「炎を呼ぶ鐘…… どうしてあなたが？」

「簡単な話さ。お前を殺せば上の席が一つ空くだろ？ それに、昔からボクはお前が気に入らなかつたんだ」

ジャックが手をつき出すと炎の縄が幾筋も走る。爆発の轟音を利用して火炎を生み出せば手を合わせた時の比ではない火力を生み出

せる。

ガイストが地面に手をつく。土壁が炎を遮るが一部の炎が粉塵爆発を起こして膨れ上がった。

「っ……」

土壁を貫通して咄嗟に伏せたガイストの左腕を消し飛ばす。空いた穴から炎が殺到。土の壁を新たに築こうとするが『火の風』によって次々に食い破られていく。

ほとんど苦し紛れにガイストは砂嵐を起こした。代償として防壁が崩れ去る。幾月の防御を貫通するほどの攻撃力を生み出すのは第三位のガイストでも容易ではないのだ。

ジャックが左腕を伸ばす。

球形に押し止められた炎の塊がリンと澄んだ音を立てて炸裂、同時に火の風が吹いた。幾月を破った砂塵を全て吹き飛ばしてなお余りある一撃が森を焼く。

「どうだ……？」

黒煙に視界が包まれる。砲戦型の魔術師であるジャックの初動は決して早くない。ジャックは少し油断していた。仕留めたと思っていた。だから黒煙の中から超速で駆け抜けたナイフを防ぐことができなかった。

ジャックとストームの急所を目掛けて三本、的確に投擲される。ストームはライターを投げて横殴りの爆発を展開してナイフを吹き飛ばす。

（おいおいストームのやつこつちのも防ぎやがれよあのレズめ幾月さえ無事ならどうでもいいってかボクはお前を助けてやっただろうがぶざけやがってえっ！）

何かしようにも『炎を呼ぶ鐘』を使ったジャックには音が残っていない。まずい。死ぬ。

ガキンッ、と音になった。

「……幾月？」

血まみれの女がゆらりと立ち上がる。カランとナイフが落ちる。

一ミリも刺さっていない。

「ガイスト……、決着を……」

ボロボロの幾月が呟く。飛び散っている血から不純物が取り除かれて彼女の体に戻っていく。

（血流操作？ こいつの力は、存在がどうこうじゃなかったのか……！？）

煙が晴れた先には奇怪な宴が死んでいた。全身が焼け焦げているが致命傷には見えない。消し飛んだ左腕からはまだ血が流れている。幾月の表情が急速に冷めて行く。

「いくつきい！」

飛び付いてきたストームの頭を幾月はかわせなかった。痛覚を弱めて受け止める。傷だらけの胸に頬擦りしているので見る見るうちに血で染まっていくがストームはまったく気にしていない。

「ベル。約束通り……、ヴァジュラ三人分の情報を寄越して貰うぞ」

「ああ、どうせボクが殺ろうと思ってた連中だ。あんたが殺してくれるなら話が早い」

「……まさか、最近頻発している二桁台の暗殺はお前が？」

ジャックは何も言わずに幾月から顔を背けた。幾月もわりとどうでもよかったのでそれ以上は特に何も言わない。

壮介とゴブレットは建物の中に入った。階段があり左右と正面に合計六つの部屋がある。広いフロアが広がっていて赤い絨毯が敷かれ、シャンデリアが室内を照らしている。外観からは想像もつかないほど内装は見事だ。

二階から誰かが見下ろしていた。

「ついてきて、こっちだよ」

誰かが言い、奥の部屋に消える。ゴブレットと壮介は顔を見合わせた。

「どうする？」

「もうヤケクソだよ。どうにでもなれだよ」

足早にゴブレットが階段を登る。

二人がそこへ踏み込んだ瞬間に扉が閉じて景色が変わった。突然真っ暗になる。ジャックよりもまだ幼い少年の姿だけが暗闇の中に浮かび上がった。

「やあ、待ってたよ。やつときてくれたんだね」

少年はニコニコと嬉しそうに語る。ゴブレットと同じ金髪碧眼で中性的な顔立ちの美少年。

「最後に会ったのは君があのか消える魔術師に連れ去られる前だから五年振りかな？ あ、でもこの姿じゃわからないか」

「……こいつが、ミハイル？」

ゴブレットが首を横に振る。彼女にも事態が呑み込めていないらしい。

「きつといろいろ訊きたいことがあるよね。何が聞きたい？ まずはやっぱりこれかな？ あのか消える魔術師は多分死んでるよ。彼が久々の自分の腕試しに殺しちゃってると思う。ミハイルを使ってセレクトに頼んでガイストくん？を殺したのは彼の前にどのレベルの魔術師にまで僕がこの『あなたが好きくて堪らない』マジカルマリオネット』が効くのか実験したかったからなんだ。わかってるよね？ 死体を操る魔法だ。」

僕の目的、はまたの機会にしようかな。君はともかく隣の彼に話すにはまだ早いや。ともかくその手段は魔術師の間に戦争を起こすことだ。君が欲しかったのは単なる恋心だよ。それ以外に理由があるとすればやっぱり『底無しの聖杯』が聖書の側についているのが邪魔だったのかな」

「君は……、誰？」 「ええ？ 僕は僕だよ。名前はグリードだ。グラトニー、君と同じ。ガブリエル」 フォールとも似ているが彼女とはベクトルが違う。ゼクトはすごいね。純然たる人の身であれば大きな力を抱えているというのだから。あれは間違いなく天才だ。」

時代が違えば天災だったかもしれない。『暗くて深い黒』は頂け
ない。あの紛い物には吐き気がする。君はこんなことも覚えてない
の？」

「……」

「なんだよ。久しぶりに会ったのに随分つれないなあ。普通は記憶
の封印っていうと多少のショックで元に戻るものだけど、あの消え
る魔術師はもしかしたら完全消滅させられるの？ 少し寂しいな。
僕はその名の通り、『あなたが欲しくて堪らない』んだ。一度欲し
いと感じたモノは何がなんでも手にしないと気がすまない。

しかし困ったなあ。僕と会話をすれば思い出してくれるモノかと思
ってたんだけど、どうやらアテが外れてちゃったみたいだ。一応
訊いておくけどさ、ねえ『この世は私の腹の中』、君さ、禁書側に
戻る気はない？ できれば君を無理矢理従えるようなことはしたく
ないんだけど……」

本当に申し訳なさそうに少年は俯いた。

第14話：美味しかった

「よお、小物。生きてるか？」

携帯電話から聞こえた声に幾月は思わず顔をしかめた。

「ゼクトか？ なぜ私の番号を知っている」

「あ、あたしが教えたのかな。ミハイルの居場所を見つけたらあたしは幾月に教えて欲しいのかなー、ってお願いして」

幾月の胸に鼻先を押し付けながら顔を上げてストームが言う。幾月は舌打ちする。確かに探知系でゼクトの右に出るものはいないが彼に頼るのは癪だ。それにいまとなってはなんの意味もない。

「もう遅い。こちらはミハイルのアジトに踏み込んだ所だ」

「そのことなんだがよ。その中にミハイルはいないらしいぜ」

「……なんだと？」

「セレクトのやつが殺ったんだとよ。場所はホロウバステイオンの中の、あれってなんだったか？ えーっと、迷宮街ラベリンスだっけ。弱雑魚どもの溜まり場にある建物の中」

幾月が静止するよりも早くジャックは駆け出していた。古い洋館に飛び込む。音の属性を持っているジャックなら特定の音を盗み聞きする程度は容易い。傷だらけの全身は意思を無視して鈍行して幾月は止めることを諦める。

「それからよお、ストームから死体行使術がどうこうって聴いたんだが、

セレクトは「もしそんな術が使えるなら俺はとくにガブリエルⅡ フォールを殺してるさ」ってよ」

ジャックは一見古びた建物の中に飛び込んだ。外観からは想像がつかないほど中は整っている。順番に開けていくのがもどかしくて

ジャックは爆炎を振るい左右の扉を吹き飛ばした。視線だけで確認し、階段を登る。二階の扉を開く。

ゴブレットの金髪が映る。ジャックは足を止めた。

「なにが……、あった？」

思わず溢す。

そこにあったのは、

気絶したサエガキソウスケと上半身のない死体が一つ、それが思い出したようにコポリと断面から血を流し始める。

金髪が揺れてゴブレットが振り返る。口端から血を垂らしてグラトニー「ゴブレットは微笑んでいた。何かを飲み下すように喉がごとくりと小さく鳴る。唇がわずかに動いた。ジャックの音の感知に届かなかつたし、ジャックは唇を読むことなんかできはしないが不思議となんと言ったかがわかった。比較的よく耳にする言葉だからだ。ろっ。

おいしかった

だ。

第一部・終わり

第14話：美味しかった（後書き）

・ごめんなさい

見切り発車で初めましたが実世界ファンタジー小説なめました

orz

戦う動機を作るのが超ムズい……；

地の文がうまく書けない。

携帯なくして続きが紛失したこともあってかなり質が落ちてます

ね……

正直二部をちゃんと書ける自信があんまりないです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6708k/>

M a g i c

2010年10月26日08時40分発行